

第4回アイランドシティ・未来フォーラム

平成23年10月8日（土）

【事務局（谷口）】 それでは、時間になりましたので、開会に先立ちまして、事務局からご連絡申し上げます。

まず、本日お配りしております資料のご確認をお願いいたします。資料は会議次第、委員名簿、座席表、それから、これまでの委員の皆様からの主な意見の整理表、それと、本日は委員意見の集約（骨子）、それから、これまでの意見を踏まえたアイランドシティ・未来フォーラムの提言の枠組みと論点整理（案）というA3の1枚物、それから、本日の説明資料といたしまして、福岡市の全体ビジョンとアイランドシティ、森委員からご用意していただきました、環境未来都市福岡アイランドシティー自然と共生できる文化エコタウンーの資料。

また、説明資料の関連といたしまして、アイランドシティでのイベントチラシ、やぎエコ実証実験プロジェクト、それから、すこやかウォーキング大会、グリップキャンペーン、ツール・ド・ふくおかのチラシ、日中韓デジタルコンテンツ共同授業の実施についての記者会見の資料もお配りしております。

また、委員の皆様には、説明資料の中で引用されている平成19年度のアイランドシティ整備事業の検証検討報告書を参考資料としてお配りしております。

また、これまでの会議での説明資料等ファイルにとじ込んでおりますので、必要に応じてご参照ください。なお、このファイルは次回以降も活用しますので、会議終了後は回収させていただきます。

それから、本日青木委員はご欠席でございます。

次に、報道関係の皆様及び傍聴される皆様には、当フォーラムの円滑な議事進行にご理解とご協力をお願いいたします。カメラ等の撮影取材は、委員の皆様のご自由な発言、議論の妨げとならないよう十分ご配慮をお願いいたします。

また、傍聴者の皆様には注意事項をお渡ししております。傍聴席からの発言、拍手等できません。注意事項を守られない場合は退席していただきますので、ご協力のほどどうぞよろしくお願いいたします。

それでは、これより会議の進行は出口委員長をお願いいたします。どうぞよろしくお願いいたします。

いたします。

【出口委員長】 皆様、こんにちは。よろしくお願いいたします。

それでは、ただいまから第4回アイランドシティ・未来フォーラムを開催いたします。

お手元の次第のとおり議事に入らせていただきたいと思います。まず、これまでのご意見を踏まえまして、今日は福岡市のほうから「市の全体ビジョンとアイランドシティ」ということで、細かく五つの項目に区切って補足説明をしていただくことになっております。これには、以前のこのフォーラムで宿題となっておりましたことも含まれております。

それから、本日はフリーディスカッションがメインで、皆さんからご意見をいただき、それをまとめていきますが、会議時間を少し長目に3時間とっておりますので、途中で5分ほどトイレ休憩を挟みたいと思っております。

今日の配付資料の中に森委員さんから追加で地元の自治会のご意見をまとめられた資料がございます。これは、フリーディスカッションの中で、森委員さんにご説明をしていただく予定でありますので、よろしくお願いいたします。

後半のフリーディスカッションの進め方ですが、お手元の資料を事前に事務局から配付をさせていただきましたが、まず、過去3回のフォーラムで皆様から出されました意見—場合によっては質問やコメントも含まれているかもしれませんが、実はかなりの量のご意見を既にいただいております。それを議事録の中から抽出するような形でとりあえず列挙をしたものが、A4のホッチキスで2カ所とめております委員の意見の整理表です。これは前回もお配りしましたが、さらに3回目のフォーラムでも出していただいた意見も含めまして整理しております。第1回目に、事務局から、こういったようなことで意見をいただきたいというカテゴリーがありましたので、そのカテゴリーの中に配分するような形で、関連するご意見を列挙しており、発言された委員のお名前も入れております。既にこれはメール等で配付済みですので、ご確認いただいているかと思いますが、もし、何か補足などありましたら、お願いしたいと思います。

さらにこれをもう少し見やすくしようということで、A4の2枚物で、アイランドシティ・未来フォーラム委員意見の集約（骨子）という、集約させた資料でできるだけ委員の方々の意見全体を網羅するような形でまとめております。私が申し上げるまでもありませんが、このフォーラムの最終的なミッションは、アイランドシティの未来像、あるいは新たな施策、あるいはそれに向けてのテーマや課題について提言としてまとめ、それを提出することです。それに向けて皆様からいただいた意見を集約しないといけないものですか

ら、まず第一段階としまして、骨子として委員意見を集約しております。これも、ほぼ第1回目のときに事務局から配られたカテゴリーに基づいた整理をしております。

最初の大きい1番がまちの魅力向上やまちづくりを先導するための都市機能・プロジェクトということで、まず①のまちづくりエリアですね。それに対する安全・安心も含めた居住環境。それから、交通アクセス・先行投資。それから、産業等の集約。先導的なプロジェクト。その中に、次のページ、裏ですけれども、提案されている具体的な都市機能施設等ということで、ここには以前レジュメなどで提案いただいたものを含めて、列挙させていただきました。

それから、2番目がみなとづくりエリアで、港湾機能の強化・先導的なプロジェクトに対してのご意見。あと、提案されている具体的な都市機能施設等を列挙しております。

2枚目のほうで、2点目としまして、企業等のニーズに対応した立地促進等についてのご意見。枠の中が具体的な施策ということで、事業用の定期借地などのご意見を具体的にいただいておりますので、ここに整理しております。

それから、3点目が市民・企業等への理解促進策、4点目が他機関との協力・連携、5点目は、どうしてもこの枠に入らなかった非常に重要なことをその他として列挙させていただきます。

という形で、皆様からいただいた意見骨子を整理させていただきました。

それから、もう一つ、A3サイズのものを見ていただきたいのですが、これは今日初めてお配りするものです。私の方で整理をさせていただきました。私がお本業の合間を縫ってつくったもので、昨晚できたばかりのため事前に皆さんにお配りできなかったのですが、皆様からの意見を私なりに少し整理をさせていただきたいと思ひまして、今日の後半では、できれば、この枠組みに基づいて議論していただくのがよろしいかなと思っております。もちろん、この枠組みに、私はこだわるわけではありませんので、さらに追加すべき柱とか、あるいは枠組みをもっと縮めたほうがいいのか、伸ばしたほうがいいのかというご意見も自由にいただいて結構です。白紙の状態で議論するよりは、そろそろ整理に向けて、枠組みをある程度念頭に置いた上で、ご意見をいただいたほうがいいのかと思ひ、私の方でこういう整理をさせていただきました。

簡単に、大きく二つの枠に分かれております。左の枠は、アイランドシティの未来フォーラムですので、主に未来像という言葉で表現される内容の枠組みです。通常は将来像という言葉を使いますが、未来像ということで、強みを活かした「未来像」の構想と基本的

な考え方として、上位的な計画から福岡の将来像を展望し、アイランドシティの未来像を再構築していこうではないかという強い意見をいただいています。それから、まちづくりには、文化や新しい産業といったテーマが必要だというご意見をいただいております、そのことについて左側の枠に大きく四つの柱を立てております。

できるだけ皆様の意見を網羅するような形で柱を立てたつもりでおりますが、堅苦しい言葉になっています。この辺も皆さんからアイデアをいただきたいのですが、一つ目のカテゴリーが、21世紀の展望と福岡の将来像を見据えたアイランドシティの「未来像」の構想に絡んだ意見だったと思います。論点1として、福岡の将来を展望した上で、新都市の果たすべき役割と目指すべき未来像とは如何なるものかということが論点として出されたと思います。これに対して、改めて今日はご意見をいただきたいと思います。

それから、2点目が、個性的な都市の魅力をかたちづくるテーマに基づくまちづくりの展開ということで、論点2として、21世紀を生き続ける創造都市のテーマと課題とは何だろうか。要するに、このアイランドシティの、特にまちづくりエリアをどういうテーマで仕立て上げていくのがいいだろうかということですね。

それから、3点目としましては、みなとづくりエリアの話ですが、物流・港湾機能の整備促進から複合機能の形成へと向けたプロジェクトの連鎖ということで、あのエリアは港湾・物流施設が中心ですけれども、おそらくそれだけではなくて、ほかの機能を付加するような形、あるいはまちづくりエリアと連携させるような形で発展させていくべきではないかというご意見をいただいております。論点3としましては、最新の港湾施設・物流施設を核としたみなとづくりエリアのテーマと課題とは何だろうかということです。

それから、四つ目の柱が、住みたくなる都市のブランド化と居住環境の付加価値の創造ということで、これは地元の村田委員や森委員から非常に強く要望として出していただいておりますが、論点4として、まちのイメージとブランドをどのように構築していくか、まちのネーミングの話も含めて議論していただきたいと思います。

それから、右の枠は、それを実現するための方策や施策に関してのご意見を整理する枠組みです。左側に出された未来像を実現するための方策、あえて、ここは「転換の方策」と転換という形容詞をつけております。要するに従来型の方策では限界があるということはある程度この場で共有いたしましたので、むしろ転換していくための方策と、転換という言葉をつけております。5本目の柱としては、都市成長を効果的にリードする公共投資についてです。公共交通の話も、この場でかなり出されました。軌道系がいいのか、ある

いはバス系がいいのかとか、あるいは自転車をもっと効果的に使うようなインフラを整備するとか、そういったことを含めまして、論点5として、まちづくりを進めるためにどのような公共投資や先行投資が必要だろうか、あるいはどういう公共施設をつくっていったらいいだろうかということもここに含めます。

それから、6番目の柱としては、民間開発を誘導する土地利用促進策の効果的な投入ということで、土地代が相対的に高いのではないだろうかという意見を踏まえ、論点の6として、民間事業や民間開発を促進するためにどのような施策が必要か。これについても、いろいろなアイデアを委員からの方から既にいただいております、この柱の中に整理していきたいと思っています。

それから、7点目、最後ですけれども、公民学連携のまちづくり推進拠点の設置と組織的活動の強化ということで、どのようにしてコミュニティーを育てていくか。プロジェクトやさまざまな活動が既にこのアイランドシティでは展開されておりますし、これからもいろんなプロジェクトが立ち上がっていくと思いますが、そういったものを如何に組織的にマネジメントしていくべきか。そしてコミュニティーの育成、あるいは最終的にはきちんと成熟したまちへ、魅力的なまちへとつなげていくか。そのためには拠点、あるいは組織が必要ではないかというご意見をいただいております。論点7として、さまざまなまちづくり活動と都市開発をいかに組織的にマネジメントするのかということについて皆様からご意見をいただきたい、あるいはこれまでのご意見を整理したいと思っております。

以上、七つの柱を皆様からいただいたご意見を、私なりに整理し、柱を立ててみました。できましたら、この用紙に基づいて、今日ご意見をいただければありがたいと思っております。ただ、決して、この枠組みに私はこだわっているわけではなくて、あくまでもこれはたたき台です。さらに追加すべき柱があるではないかというご意見があれば言っただいて結構ですし、あるいはこういうものは必要ないということがあれば、それでも結構です。

一応、今日の後半部は、こういうことをもとにしてご意見をいただきたいと思っております。

市役所のほうから説明を受ける前に、今、私のほうまず先に説明させていただきましたが、市役所からの説明を聞きながら、少し考えていただければと思います。何か、この時点でご質問等ございますか。よろしいですか。

それでは、最初の議題に戻りまして、福岡市の全体ビジョンとアイランドシティについ

て、事務局のほうからご説明をよろしくお願いいたします。

【副市長（山崎）】 今、委員長のほうからご説明がございましたように、未来フォーラムで今後議論していただく前提ということで、これまでも部分的にはご説明したかと思うんですけども、福岡市全体ビジョンとアイランドシティということで、福岡市の全体像の中でアイランドシティを位置づけていただくという形での補足のご説明をさせていただきたいと思います。

過去、現在、未来ということで、委員の方々には未来を語っていただくということになるんですが、私のほうからの説明は、過去と現在、今までどういう形で検討してきたかということをご説明させていただきたいと思います。

お手元に資料がございますが、できれば、前面の画面をごらんいただいてご説明をさせていただければと思いますので、ちょっと照明を暗くさせていただきます。

委員長からご指示がありましたように、まず、まちづくり、それから、産業政策、交通体系、財政状況、そして、最後にアイランドシティのまちづくり・みなとづくりを現時点でどういうふうに考えているかというご説明を、できれば30分ぐらいでさせていただきたいと思います。

まず、まちづくりの視点でございますが、ご案内のとおり、福岡市というのは昭和47年に政令指定都市に移行したわけですが、その後15年ぐらいしまして、昭和62年に基本構想を策定してございます。ちょうど25年たちまして、現在新しい市長のもとで、この基本構想を新しくしていく新ビジョンの策定作業もしているんですが、この基本構想の中で打ち出した考え方が、多核分散型の都市構造でございます。

地図をごらんいただきますとおわかりになりますように、福岡というのは、非常に恵まれた地勢を持っておるわけでございまして、博多湾を抱きかかえるような形になっているわけですが、それに対応した都市構造といたしまして、よく言われるのが、こういうY字型の都市軸を持っていて、この形での整備を行っていくというのが、この基本構想の考え方でございます。

具体的には、翌年に、多核的な都市構造を目指して計画的な市街地整備を推進していくというコンセプトで基本計画を策定いたしました。「多核的な」といいますのは、こちらに主要拠点ということで、幾つかの拠点を全市域内に張りめぐらせるという考え方で、いわば市域全面を計画的に市街地として整備していくという考え方を打ち出しているところでございます。政令市になってからしばらくの間、立ちおくれておりました都市基盤、生

活基盤などについて、福岡の特色に基づいて開催されるアジア太平洋博覧会などイベントとあわせて、形成してまいろうということになったわけでございます。その結果として、市民の生活の向上に寄与する多くの都市基盤や生活基盤が形成されまして、評価としては非常にコンパクトで住みよい町という評価を得るようになったわけでございます。

今、新ビジョンの策定を行っているということを申し上げましたが、委員の皆様方の一部にもご紹介させていただいたように、有識者の方のご意見をいただいております。その中で、政策投資銀行の藻谷浩介さんからは、この25年前のまちづくりの構想をそのまま実現できた都市というのは日本では福岡だけであるという高い評価を受けております。住みよい町としての評価を受けている根本は25年前の基本構想にあったということであろうと思いますが、こういうまちづくりを平成に入りましてからも10年ぐらいまで続けてまいったわけでございます。

この次、現在の基本計画が平成15年に策定されております。皆さんご記憶のとおり、この間に日本経済においてはバブルが崩壊したわけでございますけれども、この間も非常に急速なスピードで福岡市はまちづくりを展開しております。いわば、まちづくりの優等生ということになるんですが、現在の基本計画での考え方として、それまでの考え方を、まず踏襲すると、バランスがとれたまちづくりを引き続き展開するというのが一つでございます。

あわせて、新たな拠点ということで、西は九大、そして東はアイランドシティを新たな拠点として開発していくという方法論を新たにつけ加えたのが、この平成15年ということでございます。ある意味、今までこの考え方でまちづくりを展開してきたわけですが、先ほど例に挙げました藻谷さんからは、バブル崩壊後もここまで全面的な展開をしているのは福岡市ぐらいだろうという辛口の評価もいただいております。

ちょっと視点を変えて、財政面からこの間のまちづくりの状況を見てみますと、このようにお示しできるかと思えます。この棒グラフと折れ線グラフは、棒グラフが市債の発行額です。大体市債を発行して借金した分だけ投資を行っているというふうに見ていただければよろしいかと思えますし、借金ですので、当然、元金、利息をすべて耳をそろえて返さなければいけないというのが公債費でございます。

例えば平成元年よかトピア、2年が国体だったと思えます。それから、平成7年にユニバーシアードと、こういうイベント物を一つのターゲットといたしまして、非常に急速な

市債発行、つまりはまちづくりを展開してきている。このカーブが非常に高いんですね。今回のフォーラムでも、よく中国、韓国のまちづくりはスピード感があるとおっしゃる方がおられますが、思い起こしていただければ、実は福岡市もこの時代には大変に急速なまちづくりを展開しておったということでございます。

その結果といたしまして、社会資本の整備において、都市計画道路、下水道、地下鉄、あるいは学校の耐震化等、非常に高い水準を達成することができたということで、これが住みよい町という評価に、一方ではつながっているわけですが、他方、財政面で見ますと、市債残高が極めて高い水準になっております。大体平成6年が一つのピークになりますけれども、その後も、実は高い水準の投資を続けまして、平成10年過ぎぐらいまで、極めて高い水準で公共投資を行ってきている。その結果、公債費が右肩上がりが増えております。ちなみに、私、このあたりのころに福岡市役所で仕事をしておりまして、ちょっと下がったところぐらいまでいたんですけども、依然として高い公債費の水準になっている。これが背景であるということでございます。

ということで、この点も加味しましたまちづくりの今後の課題といたしましては、一つは都心部、そして新たに加わりました二つの拠点、この部分の形成をさらに進めて、人を引きつけ投資を呼び込むということです。

それから、もう一つは、とはいうものの、各地域の特性をしっかりと見きわめて、これまで以上に各地の特性に応じた都市機能の誘導をしていく必要があるということでございます。このソリューションといたしましては、三つほど考えられるであろう。

一つは、選択と集中で、プライオリティーをつけるということでございます。二つ目が、民間資本の誘導ということも含めた官民連携。そして、総合特区など、国の制度の活用を進めていくということで、都市の魅力、拠点性を高めていき、人や投資を呼び込むまちづくりを進めていく、これが基本的な考え方になっていくであろうということでございます。言葉を変えて言えば、これまでのような全面展開というのはほぼ終了してきておりますので、メリ張りをきかせたまちづくりをしていく必要があるであろうということでございます。

そのメリ張りのきかせ方なんですけど、まず第1に、成長の核は都心部でございます。そして、福岡市がこれまでに最も成功したまちづくりと評価されているシーサイドももち、それから、九大学研都市、そして、今回ご議論いただいているアイランドシティと、この四つが大きな発展の核になるであろうということございまして、ちょっとこの図を頭に

置いていただいた上で、実際にどう人や投資を呼び込むまちづくりをやっていくか、次にご説明したいと思います。

具体的には、国の諸制度の活用ということで、現在申請をしております三つの構想がございます。一つは、国際戦略総合特区——総合特区と言われている制度で、今、アイランドシティ、それから、箱崎、シーサイドももち、九大学研都市と都心部をカバーした申請をさせていただいております。それから、都市再生の緊急整備地域については、都心部の再改造ということで、三つのポイントに焦点を当てた申請をさせていただいております。それから日本海側拠点港として、港湾をすべてカバーする形で申請をさせていただいております。この三つの申請を、現在国に申請中で、三つ取れば、先ほどお示した今後のまちづくりの一つのキックオフぐらいにはなっていくであろうということで、今、国のほうにご説明に入らせていただいているところでございます。

一つずつ、簡単にご説明をいたします。まず、国際総合戦略特区でございます。

都心天神に福岡県が今年からアジアビジネス拠点を設けていかれることになっていきます。シーサイドももちはIT関連、それから、九大学研都市と今宿には三菱さんの工場がございますが、パワー半導体を含めまして、有機EL等の研究開発拠点がございます。そして、アイランドシティは、まちづくりエリアには環境エネルギー関連のスマートコミュニティと。それから、みなとづくりエリアはRORO船のターミナルをアイランドシティから箱崎に移転するというところで、東アジアグリーン物流網の拠点を形成していこうと。タイトルがグリーンアジア国際戦略特区ということで、全国で5カ所しか指定がされないことになっていて、今回初めて福岡県、北九州市さんと共同で国に申請をすることになっております。共同でなければ、おそらくこの5カ所に指定されることはないだろうということで、今回このような形で申請をさせていただいております。北九州市さんは環境に強い、そして、福岡県さんはアジアビジネスを推進しておられて、この二つを我々が物流網でお支えするという概念の構想で打ち出しておりますが、この総合特区の構想で大体私どもが今考えております市内の拠点の整備がキックオフできるのではないかというふうに考えております。

それから、地域再生の緊急整備地域は都心部ということでございます。これまでは、どちらかといいますと、天神と博多駅、この二つのエリアを中心とした考え方でございました。今回新たにウオーターフロント部の再整備も含めた形で、3カ所の再整備を民間投資を活用して集中的に進めるための申請をさせていただいております。これも全国で10カ

所の指定ということでなかなか狭き門ではあるんですけども、これも頑張って取ってまいりたいということでございます。

最後になります、日本海拠点港、これは3・11の震災以降、太平洋側の港というのは、非常に大津波の可能性もあるということで、日本海側の港湾の重要性が言われるようになりました。その日本海側の拠点港の中でも、最も重要と考えられるのは博多港であろうということで、これも国のほうに申請をさせていただいておるところでございます。

以上、三つの構想で、国の指定を取り、まちづくりを展開していきたいというのが、現時点での構想でございます。

続きまして福岡市の産業政策でございます。これも過去、現在のところまでご説明させていただきたいと思いますが、以前にご説明させていただいておるように、福岡市として重要と考える6分野において、2002年に交付金を創設してございます。

まず第1に、知識総合型産業ということで、情報化社会を見据えて、知識創造型産業、IT産業への立地を促進するための交付金制度を持っております。1990年代をごらんいただくと、このあたりは、福岡市のまちづくり、それから、産業政策というのはシーサイドももち一点集中といいますか、ここを一生懸命やるということでございましたが、現在は、さらに展開をいたしまして、九大学研都市に県と共同で産学連携交流センターも開設させていただいております、これが1本の柱になっている。それから、カーアイランド九州として、その関連の自動車産業。それから、今後の高齢化社会を見据えまして、アイランドシティをフィールドに、ふくおか健康未来都市構想を2000年代に入って作成をし、その産業の集積をアイランドシティに図りたいという構想。もう一つは物流で、香椎ICに関しての立地を促進すると。それから、冒頭ご説明しました基本構想の中で、アジアへの近接性を活用したアジアビジネスの展開。この五つが市として現在、それから、今後必要な、財政支援措置を講ずる分野ということにしております。

これ以外に、工場が市外へ転出することを防止するということで、都市型工業であるとか、新たな産業として集客産業も展開をしたいということで、これは別枠で今後考えていく必要があるかと思っております。

もともと福岡市というのは支店経済と言われていとおりでございまして、ベーシックな部分では、卸・小売・サービス業の支援というのも必要であるかと思っておりますが、現在考えております今後の産業としては、主要6分野のうち特にこの5分野が、福岡をリードする産業であろうということで展開をしてまいりました。その結果どうなっているかという

ことで、まず、都心部でございますが、知識創造型産業、それから、アジアビジネスの立地が多くなっております。それから、ももちエリアはシステムL S Iを中心としたIT知識創造型産業が多い。港湾エリアは物流関係の企業立地が多いということで、交付金を創設して以降、これだけの成果を上げて、企業立地を福岡市は展開してきているということでございます。

将来をご議論いただくに当たっての産業政策上のアイランドシティの方向性でございます。一つは、もともと想定をしておりました高齢化社会に対応するということですが、現時点においては、健康・医療・福祉関連の企業の立地は、残念ながらまだ少ない状況にあります。一方で、その後の課題といたしまして地球温暖化対策、あるいは原発事故への対応ということで、環境・エネルギー関連産業というものが今後は知識創造型産業の中でも有望になってくるのではないかとということで、この点、また別途新たに福岡市では環境・エネルギーの戦略を策定すべく有識者会議を今月設置する予定になっております。

一方、アイランドシティの特性でございますが、新しく計画的なまちづくりができる、それから、豊かな自然環境と都市的利便性に恵まれているということで、この二つの産業政策のフィールドでの展開が行われてきているということでございます。

市の構想といたしましては、ふくおか健康未来都市構想、それから、アイランドシティの自然エネルギー活用ビジョン、この二つのビジョンを持ちながら、具体の事業を展開していくという形になっておりますが、もう一つ、これもこれまで何度かご議論されているように、雁ノ巣や香椎浜周辺には、非常にスポーツ関連の施設が集積しているとか、あるいは環境分野に関しましては、これはあまり知られてなかったようなんですが、福岡スマートハウスコンソーシアムの展開が中央公園の一面になされております。これがありましたので、総合特区の申請ができたという非常にすぐれた取り組みも、実はひそかにアイランドシティでは展開されている。これは滝本委員からご教示いただいたんですけども、こういう状態でございます。

ということで、現状と特性から考えられる今後のアイランドシティの方向性としては、一つは当初から想定をしておりました健康・医療・福祉関連産業の立地、もう一つは、近時の課題であります環境・エネルギー関連の立地、こういうことが有力な候補として考えられるのではないかとということで、これは最後にまた、ご説明したいと思っておりますか、環境・エネルギー分野、健康・スポーツ分野を考えたい。今日お手元にいろいろパンフレットを置かせていただいておりますが、例えば環境・エネルギーではエコミュージアム、それか

ら、グリッピーキャンペーン、やぎエコ実証実験という、いろいろな取り組みもしてございますし、本年度はEVバスということで、アイランドシティから千早まで電気バスを走らせるという社会実験をこれから展開する予定でございます。いずれは、この電気自動車のバスのラインを博多駅まで引っ張っていくという構想のもとに、環境・エネルギー分野への取り組みをしてまいりたい。

それから、スマートハウスについては、れんが住宅というのが中央公園の片隅にございまして、ご存じかどうかわかりませんが、あちらで、実は民間企業の方々が、スマートコミュニティを形成するための基礎的な勉強というか、実験をされておりました、非常に高い評価を受けてございます。

健康・スポーツに関しましては、これは長沼委員にもご努力いただいておりますツール・ド・ふくおか、それから、ウォーキング大会のチラシも入れさせていただいておりますが、スポーツ・健康分野でアイランドシティのいい環境を使っていくべきであろうということと、それから滝本委員からご紹介いただきました、マート・ウェルネス・シティ構想との連携も図ってまいりたいということで、来年度はシンポジウムも開催していくような状況になってございます。

次に、交通体系でございます。話がもとへ戻るのですが、今の基本構想の中で、多核連携型都市づくりということで、このY字型の放射軸を中心として放射環状型の交通軸を形成していく。放射と環状型という交通軸を形成していくというのが、福岡市の交通体系の基本的な考え方になっておまして、ハード面では地下鉄の整備などによります鉄道ネットワークの強化、それから、放射環状型の幹線道路ネットワークを整備する、これが具体的な方法論になっております。

これをもうちょっとわかりやすく説明したのがこちらでございまして、実は、これは平成15年、現在の基本計画での交通体系をあらわしたものでございます。基幹的なY軸、これについては既に整備済みでございまして、残る放射軸と環状型の交通軸を形成していくということが、この時点での課題でございました。あわせまして、新しい課題としてアイランドシティ、それから、九州大学、ここが軸の一部に加わるという形になりまして、新しい拠点へのリンク、交通体系の整備ではこれが大きな課題になったのが平成15年でございました。

これをどういうふうな形で解決してきたかということでございますが、ちょっと横道にそれますが、福岡市の場合、交通政策を考える上で、バス路線網の充実というのが非常に

大きな特色でございます。地下鉄35万人に比べまして、1日当たりのバス利用者が依然として40万人ということで、実は主軸はバス路線網であるという前提のもとに交通体系を検討していった結果、一つは七隈線でございます。これは、こういう放射軸の一つを形成します。特に西南部に関しましては、これまで交通網が手薄であったということもございまして、放射軸の形成として七隈線が開業しております。それから、外環道、それから、高速、これが環状軸ということで、放射環状型の大きな部分ができ上がっているという現状でございます。

今後をお考えいただくということになるわけですが、まず、道路はどうするかということでございます。道路に関しましては、今後に向けて三つの大きなポイントがあるというふうに考えられます。

一つは、新しい拠点でありますアイランドシティですが、アイランドシティはもともと東部地域の交通体系の拠点という位置づけがございまして、このためにアイランドシティへの自動車専用道路の導入を現在検討中でございます。我々、自専道と言っておりますが、これが新しい拠点とのリンクをつくるという意味での、一つのソリューションです。二つ目が、西部に移転いたしました九大学研都市とのリンクでございます。これは道路網の整備ということで、学園通り線を整備しております。それから、もう一つございまして、これは南部への放射軸への完成形ということで、連続立体交差事業——連立事業と我々は呼んでおりますが、市域内は福岡市が中心、市域外は県のほうに、今事業をやっていただいております。県のほうが、南のほうからずっと来てまして、我々の事業がちょっとおくれしているということですが、これは平成35年までかかるということでございまして、この三つに、今後の大きな取り組みとして現在着手をする、あるいは検討しているところでございます。

鉄道は、七隈線の最終形ということで、都心部における鉄道ネットワークの強化をするということで、事業費約450億円をかけて、10年間で天神南から博多駅へ延伸するという政策決定を今年の2月に行っております。来年度から国庫補助金と地方交付税措置をいただくということで、財源も確保した上で、この2駅の延伸を行うことを現在の最重要課題に置いております。

実はもう一つ課題がございまして、貝塚での箱崎線と西鉄の直通運転化でございます。これは事業費として、大体200億円から250億円で、採算性が課題です。現在検討を進めてございますが、財源面の問題がございまして、先ほどこちらは国庫補助金の当てがあ

るところというふうな話をご説明しましたが、こちらはまだ、そこまでいってございませんので、現在検討中です。

実は、この直通化の問題が、アイランドシティへの鉄軌道の議論に大きく影響するというところで、交通体系の最後は、鉄軌道導入の検討について、これまでの経緯をご説明させていただきます。

結論から申し上げますと、平成19年に現在の考え方を整理したわけですが、当面は自動車交通の需要の増加が予想されるので、自動車交通への対応が優先課題であると。一方鉄軌道に関しては、中長期的な視点に立って検討するという事になっております。鉄軌道を導入する場合の課題としては二つございます。今し方ご説明いたしました一つは、直通運転化の必要性ということでございまして、新しく鉄軌道を導入する場合の事業費はおおむね250億円と試算しているんですが、これ以外に、直通運転の費用が200億円か250億円で、トータルすると大体500億円かかるということで、ここに課題があるのではないかと。それから事業手法について、地下鉄のほうは事業者は決まっているんですが、直通化のほうは事業者をどうするかというところから議論しなければいけないということで、現在想定をしておりますアイランドシティへの鉄軌道導入の検討の事例ということでございます。

西鉄の香椎と香椎花園前に分岐駅を設けて、アイランドシティ2駅をつなげるという構想を持ってございますが、これは現在の構想といたしましては、単線で250億円、直通化と合わせると500億円かかる事業になります。

実は、平成12年に、いろいろな方法論があるのではないかとということで、今の案、それから、単純に新交通システムで接続をするという案、それから、LRTを敷くという案、こういう三つを検討してございますが、いずれもこちらに掲げておりますような課題がございまして、当時はこの案が最もいいであろうというふうに判断をしたということになっております。

さらに、もう一つ宿題で残ってございました、他の臨海部、埋立地の事例との比較ということでございますが、ここでは、ゆりかもめと大阪南港、神戸のポートアイランドについてざっと整理をしてみました。ただ、いずれも開業時期が平成の早い時代、あるいは昭和末期ということで、いわばバブルの時代に構想されて鉄道を敷いている事例でございますし、一つは就業人口がそれぞれ大きいと。ここはおそらく議論の余地があるところだと思うんですけども、現時点での就業人口はこれだけということになってございます。これ

を背景として、乗車人員が、それぞれ10万人、7万人、あるいは6万人と、それなりにお客は積んでいるのだが、純利益はというと、まあ、いいところかなという状況で、他の地域は行われておるようでございます。ただ、近時は埋立地で、このような鉄道を敷いている事例というのはないというふうに聞いてございます。

ご説明の最後に近くなってまいりましたが、財政状況について、アイランドシティ事業の整備事業を含めましてご説明をさせていただきます。

結論から申し上げますと、まず、福岡市の財政運営の課題でございますけれども、まず、市税などの一般財源の伸びが期待できないにもかかわらず、社会保障関係費がこれからどんどん増えていくと。他方の課題といたしまして、社会資本の大量更新期の到来によりまず公共施設の維持・更新費が大きいと。それから、冒頭申し上げましたように、依然として高い市債残高ということで、政令市で2番目に高い状況になっているということでございます。

ですので、政策的、つまり投資的に投入できる財源を確保していかなきゃいけないということになるんですが、一つは、身を切る努力をしていくということ、それから、民間投資の活用など多様な財源を確保していくということ、そして、最後にプライオリティーをつけていく、選択と集中による投資の重点化を行っていく、これがソリューションになるのであろうということでございます。

福岡市の予算でございますが、一般会計で大体7,500億円～7,600億円という予算規模になっておりますけれども、我々が自由に使えるお金、一般財源というのは、ほぼその半分ぐらいになります。この一般財源を活用いたしまして、使っている経費の内容は社会保障費、それから、商工費、そして借金返しの公債費、この三つが大きくなっております。

これが今後どうなっていくかという一番典型的な事例が扶助費でございます。先ほど申し上げましたように、一般財源はそんな増えない、税収はそんなに増えないだろうと。一方で、扶助費に関しましては、過去10年間にほぼ倍増してございまして、これが今後も確実に増加するという状況になってございます。

それから借金の状況については、よく使われますのが、福岡市は1人当たり177万円の借金を持っているということでございます。これは大阪市に次いで悪いと。大阪市というのは財政規模で福岡市の2倍以上ありますので、ある意味、福岡市が断トツに悪いという状況に実はなっているということでございますが、神戸とか京都とか、このあたりが、

ちょっとよろしくないかなというところでございます。

その反映としての公債費でございますが、これもなかなか減らないという状況がございまして、大体毎年1,000億円ずつぐらい返していつているという状況でございます。

これは、先ほどの図でございますが、ご参考までに付言いたしますと、後で出てまいります。アイランドシティ事業が始まりましたのが平成6年ですから、平成6年というのは、実は一番公共事業費がぐんぐん伸びている時期にスタートしているということでございます。一方で、今この借金返し、公債費のほうがぐんぐん増えていますので、実は、公共事業、つまり投資をするよりも借金返しのほうが多くなっているというのが福岡市の財政状況でございます。

もう一つよく言われるのが、投資水準が、この時代に比べると激減しているということです。確かにぐっと減っているんですが、よく時系列で見えますと、昔、昭和の時代に比べると、まあ、こんなものかなという水準でもあるということをごらんいただけるのではなかろうかと思えます。

もう一つ大きな課題が、公共施設の大量更新期が来るということでございます。一番大きいのが学校、それから、市営住宅でございますが、それ以外にも、文化福祉施設、あるいは市庁舎、区役所、区民センター等があつて、こういうふうなところも、これから建てかえがどんどん増えてくる。これには政令市に移行しました昭和47年をピークにして、どんどんと住宅、あるいは学校の建設を進めてきたという背景があります。私、昭和35年生まれなんですが、大体建物というのも50年ぐらいするとがたが来まして、建てかえを考えなきゃいけない。もうしばらく使わなきゃいけないということで、アセットマネジメントという手法をとりまして、施設の延命化、長寿命化を図ってまいっておりますが、これもほぼ限界に来ているということで、この大量更新にどう備えていくかという課題がございまして。一方で、文化福祉施設に関しましては、これから建てかえのニーズが出てきます。

あとは省略してご説明を進めてまいりたいと思えます。アイランドシティ整備事業について、これまでも何度かご説明しておりますが、ざっとご説明をさせていただきます。

一つは、国の直轄事業ということで、大型岸壁に関しては国が行う。ただ、国が行うといいましても、市も一部を負担するという形になっております。

それから、荷役機械、要するにガントリークレーンを含めました港湾機能の整備で、これは我々機能施設の整備事業と言っております。

それから、埋立事業ということでございます。ざっくり言えば、これがみなとづくりエリアで、こっちがまちづくりエリアとみなとづくりエリアの一部、こうなっていますが、この二つを足し合わせたものが港湾整備事業特別会計、我々が港湾特会と呼ぶものでございます。この港湾特会は、施設の使用料とか土地の分譲収入によって運営をするということで、市の税金を使わないという意味で独立採算で行ってきているというふうに、これまで運営をしております。

これ以外に、アイランドシティの場合は博多港開発株式会社による埋立事業がございしますが、忘れてならないのは、市税を活用した都市基盤の整備、あるいは生活基盤の整備も、国の補助金をいただきながら実施しているということでございまして、これをフィールドと数字の上に落とし込みますと、こういう形になります。

機能整備事業、つまり一番港湾らしい部分については、鉄道事業と同じでございまして、長期間にわたって事業費を回収する事業でございます。現時点での計画でも、平成75年度に累積赤字を解消するという、ある意味息の長い事業ということになります。一方で、埋立事業に関しましては、土地分譲で計画的に土地を処分していくことによって収支を賄っていく事業でございます。これ以外に博多港開発の事業がございまして、

ご記憶の方もおられると思いますが、昔はこっちのまちづくりエリア全体を博多港開発でやっていて、平成16年、その一部を市が引き受けるという形で、今はこのような形で役割分担をしております。

もう一つ、これまで、このアイランドシティには一般会計から多くの事業費を投入してございまして、大体765億円の事業を道路、あるいは公園、岸壁の整備などで投入しています。

これを時系列で見たものがこの表でございまして、ざっくり申し上げますと、アイランドシティ以外のかつてのシーサイドももち、あるいは香椎パークポートなどの臨海事業はある意味もうけていたという時代が長らくありまして、このもうけていた部分は、基金に積み立てることになっております。一方で、機能施設整備事業は構造的に資金不足ですので、もうけたお金で資金不足を賄うというスタイルの事業展開を長らく続けてございました。この二つの棒グラフを足しますとこのような形になりまして、年度による波はあるんですけれども、おおむねこれまで収支均衡になるような運営を、港湾特会全体では行ってきていたということでございます。しかし、近年の港湾特会の全体の収支はおおむねマイナスが続いているということもございまして、ここはこちらで積み立てた基金の取り崩し

で対応してきております。しかしながら、この基金もどんどん目減りしております、今やもうほとんど底をつきかけているという状況でございます。

ということで、港湾特会のほうの課題でございますが、機能港湾施設の整備に関しましては構造的な資金不足がございます。一方で、なかなか港湾施設の使用料を引き上げるとするのは難しい。埋立事業のほうは、なかなか土地需要の見通しが不透明であるということがございますので、ソリューションとして、これまでは基金への積み立て、取り崩しによる財源調整を行ってきたわけですが、これも尽きてしまうということになりますので、安定的な事業推進に向けての抜本的な対策が必要であるということで、その具体的な事例としてご検討賜りたいというふうをお願いしておりますのが、土地流動性の向上という展開になっております。

財政面から見たアイランドシティ事業推進のイメージでございますけれども、市全体の財政状況、これは政策的経費に投入できる財源が少なくなってきていると。一方、港湾特会は土地分譲が進まなければ資金不足が生じるということで、今後必要となりますのは、これまで以上に選択と集中を進めるということで、福岡市の成長戦略に基づく、真に効果的な投資を行っていくことが必要になります。

まずはアイランドシティの魅力づくりで、先ほどの委員長のご指摘にもございました、整理表にもございましたように付加価値、あるいはブランドを向上していく、そうすることによって、民間企業の進出、土地売却を促進していくと。その結果、みなとづくり、そして、まちづくりの効果的な推進が図られ、市税収入が増加し、港湾特会の収支が改善して、さらに、アイランドシティの魅力を高める投資が行える、こういう循環に持っていかなければいけない。来年度の予算編成方針の中では、新しく人や投資を呼び込むまちづくり、これを福岡市の最重要課題にしていこうという状況になってございます。

最後に、ちなみにということなんですが、市税収入が増加するということがよく言われるんですが、埋立地から得られる税収の状況をまとめてみました。

大きな埋立地としては、シーサイドももち地区、それから、愛宕浜のマリナタウン地区、それとアイランドシティがあるわけです。アイランドシティはまだすべて完成しているわけではございませんが、シーサイドももちでは、市税収入で年間56億円でございます。国県税——国と県の税を合わせますと、大体年間150億円の税収がございます。

アイランドシティは今のところは市税収入で10億円、国県税合わせますと23億円ということになっておるわけでございます、気がついてみると、これだけの税収を上げる

ことができる土地を育ててきたと、よく、ここまで育ててきたなあというのが、福岡市で仕事をしております立場での率直な感想でございますけれども、税金に関しましては、国、県、市、それぞれが税金を上げてございます。国に関しましては、この3地域から合わせまして、おおむね年間100億円弱の税金がございまして、補助金、あるいは地方交付税ということでリターンをしていただいております。

それから、市税に関しましては、大体80億円前後の税金がございまして、福岡市の財政規模は大体7,500億円か600億円ですので、大体その1%ぐらいを埋立地からの税金で賄っていると。それから、県税が大体40億円ぐらいあるという状況になってございます。戻りますと、これがこの好循環を生みます効果の一つ、市税収入の増加ということでございます。

最後に、もう時間も長くなりましたので、これからのご議論のご参考ということでございます。アイランドシティの強みは何かということを整理せよということでございましたので、もともとの性格、そして港湾、みなとづくりエリアの優位性、そして、まちづくりでの優位性、こういう優位性を持っているということでございますので、ご説明をいたしました環境・エネルギー、健康・スポーツ分野、これが非常に大きな特色になってくるのではないかとということと、新しいまちづくりの拠点も幾つか整備はされてございます。既に市のほうで着手をしておりますビジネス創造センターにおきまして、今月から日中韓デジタルコンテンツ授業ということで、コンテンツ分野、特にデジタルコンテンツに関しての日中韓、大学の共同授業をスタートさせております。

それから、住環境に関しましては、住民の代表の委員の方からも再々ご指摘がありますように、極めてすぐれた教育水準の教育環境のある住宅地になってきているということでございます。

それと、企業の話は、立地交付金制度をご説明いたしました但、今回のフォーラムでは、事業者の方々から、まだまだ十分足りないのではないかとご指摘がございまして。

それから、土地利用についても、土地流動性の向上という最も重要な部分についての検討が必要であるということでございます。

あわせまして、港湾に関しましては、別途港湾局が長期構想の検討委員会というところでの議論を行ってございます。港湾特会の収支というのは、先ほどグラフでご説明しましたが、こういう議論をオープンな場でしっかりしていただく必要があるだろうということでございまして、未来フォーラムでもご意見を賜りたいというふうに考えてございます。

これが最後になります。今後の立地・開発に向けた課題ということでございまして、一つは商業・産業立地について、二つは魅力のある住宅地の形成、三つとして土地価格についての課題、それとインセンティブの課題、こういうことについてこれまでもご議論いただいていると思いますので、委員長からご提案のありました整理もご参考にしていただきつつ、私どものこれまでのまちづくり、そして現在のまちづくりの状況を踏まえた上でのご議論をぜひ賜りたいというふうに考えてございます。

ちょっと長くなって恐縮でございますが、以上でご説明を終わらせていただきます。

【出口委員長】 大変わかりやすい説明をどうもありがとうございます。

それでは、今のご説明に対してまだご不明な点などありましたらご質問を受けたいと思います。もっとこの辺補足していただきたいとか、この辺の理解を深めたいということがありましたら、ご質問いただければと思います。

長沼委員、お願いします。

【長沼委員】 先ほどの資料の中に、特区の部分で人や投資を呼び込むまちづくりという部分がありました。このアイランドシティには物流、港湾というふうな書かれ方をされてありますが、いわゆる通常の物流港湾以外の特区というのも考えられているのでしょうか。質問です。

【出口委員長】 スライドの9ページ目ですかね。今、表に出していただいている部分ですね。よろしいですか。

【副市長（山崎）】 お手元の資料でいきますと、9ページにございます総合特区は、実は、総合特区というのは2種類ございまして、今回重点的に取り組みを提示いたしましたのが国際戦略総合特区ということで、北九州市さん、福岡県さんと共同申請をしているものでございます。実は、もう一つ総合特区には仕組みがございまして、ちょっとわかりにくいんですが、前面をごらんいただきますと、こちらに地域活性化総合特区というものがございまして、これは私どもが太宰府市さんと一緒になって共同提案させていただいているものでございまして、エリアは市域全域ということなんです。国際線のターミナル、クルーズの受け入れを含めまして、クルーズ船を中心とした観光に関しましての特区構想が別枠でございまして、こちらも今回ご提案をさせていただいておりますのでございます。こちら市域が全域ということなので、どこという表示がしにくいものですから、別の総合特区という扱いです。総合特区というのはこの二つの仕組みでできておりますので両方とも申請をさせていただいておりますが、アイランドシティを特にということであれば、国際戦

略総合特区のほうが適当かなということで、今日ご説明をさせていただいております。

【出口委員長】 よろしいですか。

特区というのは、基本的に国からの補助金、あるいは交付金というものがついてくるような制度なんですか。あるいは規制緩和や権限の移譲だけを申請する制度なのか。特区というのにおそらくあまりなじみがないと思いますのでご説明ください。

【副市長（山崎）】 9ページ、10ページをごらんいただくとよくわかるかと思いますが、左上のほうに特区の内容ということで、支援措置というのが書いてございます。いずれも規制緩和、あるいは金融支援、税制優遇ということで、お国もお金がないということで、財政支援というのはほとんどございません。規制緩和、あるいは金融的な支援なり、税制上の優遇措置で何とかやってくれというのが今回の特区でございます。

特に、特定地域の再生緊急整備事業に関しても、民間投資で再整備を行っていただきたい。もともと福岡は都心部は民間活力を使って整備をしてきているところでございますので、方法論としては、財政上の措置というよりは規制緩和ですね。一部財政支援もございますけれども、税制と規制緩和というのがメインになっています。これはちょっと特区とは違いますが、同じスタイルで、今、申請をしておるところでございます。

【出口委員長】 ありがとうございます。

ほかに何かございますか。増山委員、お願いします。

【増山委員】 ご質問は鉄軌道のところなんですけれども、臨海副都心のゆりかもめと比べますと、規模も全然違うわけなんですけれども、事業者の施工分、それから、公共事業で相当負担している分があって、事業者のほうは純利益を上げているということだと思えます。居住人口とか就業人口ももちろん違うんですけれども、多分、乗車人数が1日で10万人ということなんで、多分ホテルがあつたり、商業施設があつたり、あるいはビッグサイトなんかがあつて、域外から来る人が非常にたくさんいるという前提で成り立っている事業のように思うんです。こちらでの検討では、採算性などに課題があるというふうに書いてあるんですが、前にもちょっとご質問があつたと思うんですが、500億円ぐらいの事業費について、どのぐらいの乗車人数があれば成り立つとか、そういう検討はなされているのでしょうか。

【出口委員長】 むしろ逆算して、そういった公共交通の採算性がとれる条件というのは、どれぐらいの乗降客が要るのか、あるいは、例えばどれぐらいの規模の集客施設がアイランドシティに来ると、導入できるのだろうかという質問です。

【副市長（山崎）】 前面にあります、27ページの表の幾つかの案を平成12年に考えたんでございますけれども、一番下に乗車需要予測とございます。これぐらいが乗れらるであろうということで、一番可能性があると考えたのが、今の原案なんですけれども、子細に見ていただきますと、鉄軌道を導入する場合の課題ということで、直通運転をやらなきゃいけないということが一つと、事業手法ということで、これは他の地域の鉄軌道も同じですけれども、開発者から負担金を取りましょうという構想になっております。平成12年当時は、この開発者負担金というのは博多港開発から大体100億円ぐらいどんといただきますよということを前提に、やっとなんか採算がとれるかもしれないなという構想でしたが、そこが全くなくなっているということです。具体的な数値での試算はしてないんですけれども、その前提が今崩れておりますので、少なくともプラスに当たることは全くないだろうということで、なかなか厳しい状態にあるということでございます。19年に再度検討した時点では、中長期的な視点に立って考えるということになっているということでございます。

【事務局（財津）】 補足して説明させていただきます。鉄道関係がどのくらい乗れば採算に合うのかというお話なんですけれども、学会というか、土木関係の資料、論文といいますが、それを見たら、例えば高速鉄道でいいますと、大体1キロメートル当たり1万5,100人ぐらいないとなかなか採算に合いませんよという論文が一部あります。今回2キロメートルで乗降人員が1万5,600人となっていて、1キロメートルに直しますと、大体7,800人ぐらいとなって、その論文によると1万5,000ですから、倍ぐらいはないと、なかなか採算に合わないというお話になってまいります。

そこで、補助金とか、先ほどちょっとお話がありました、博多港開発による負担金とか、開発者の負担金とか、そういうものでできるだけイニシャルコストを負担していただければ、何とかとんとんになるんじゃないかなというのが、当初の計画でございます。

【出口委員長】 ありがとうございます。増山委員、よろしいですか。

【増山委員】 その乗車人数というのは、今計画している就業人口とか、あるいは居住人口が満たされた場合には、結果的に一応、このくらいいくよねという数字になるんでしょうか。

【事務局（財津）】 このときの設計条件でございますけれども、この時期は、従業者が大体1万1,000人で、現在の計画では、従業者が港と町と合わせて1万8,000人です。居住者については1万8,000人で、この当時と変わりません。ですから、従業者数

が当初の計画から比べると7,000人ぐらい増えているということでございます。

【出口委員長】 それは、現在のアイランドシティの計画人口ですね。

【事務局（財津）】 はい。現在の、21年度につくりました新事業計画でございます。

【出口委員長】 今日の27ページ目の資料の左下の乗車人員需要予測の1万5,600人は平成29年時点と書いてありますが、まだこれは計画途中段階での需要予測ということですか。

【事務局（財津）】 平成29年度といいますと、ある程度町が熟成してきたころの予測でございます。

【出口委員長】 そうすると、この時点で従業者が1万1,000人で、居住者が1万8,000人いるとしたときに、1日当たり1万5,600人の需要予測だと。

【事務局（財津）】 最終的にはそういうことです。今、途中で、計画では、最終の土地分譲が大体35年ぐらいで、町が熟成するのは、そこに建物が建つ必要がございますので、多分30年代の後半とか、そういうことになると思います。

【出口委員長】 そうすると、先ほどの土木学会の数字の1キロ当たり1万5,100人の乗降客が採算ラインだということ、大体その半分のレベルにしか達してない。

【事務局（財津）】 今、半分のレベルということです。

【出口委員長】 そういうご判断だということだそうですね。

では、小俣委員。

【小俣委員】 非常にわかりやすい副市長からのご説明を受けて、未来へ向けての云々というのがちょっと幅が狭くなった、暗くなったような感じがしますけれども、それはそれとして、ご質問が二つあります。

一つは、港を箱崎のほうとICのほうに集約をして、今の中央埠頭をコンベンションを含めてまちづくりと人のにぎわいの場所にする、中央埠頭にある港湾機能を全部向こうに持っていくということを第1回目にちらっと私が言ったんですけども、そういうご計画はございませんか。それが1点。

来年はボイジャー・オブ・ザ・シーズという13万8,000トンの3,100名の船が来ますし、それが毎週でも来るようにしないといけないときに、あの中央埠頭というのは……。それを箱崎とICに全部持っていくことはできないのか。その質問が一つ。

もう一つ、今日は青木さんが来ていませんけれども、もっと大きなビジョンが要るということで、ここにも出ていますけれども、エコとか、健康とか、子供とか、アンチエイジ

ングとかいうアイランドシティにしないといけないと思うんです。鉄道のご説明が、今ございましたけれども、EVバスという経産省の実験の話がありました。全部をEVバスにするというシミュレーションというのはなさっていないのでしょうか。というのが、お台場にしても、神戸にしても、キラコンテンツみたいなどころ——フジテレビがあつたりして集客があるから少しはいけるんでしょうけれども、福岡で、南の路線でもシミュレーションが甘いと新聞でも言われている中で、このご時世で、財政状況で、鉄道なんてことは一切考えられないんじゃないかなと思うんです。むしろ、EVのバスということで、すごくエコと健康をアピールできるので、そのご検討をされてないんだったら、されるべきじゃないかなというふうに少し思います。以上、どうでしょうか。

【出口委員長】 いかがですか、バス交通についてのご質問が出ました。しかも、従来のバスではなくて、EVバスなどの少し先端的なバスのシステムの導入についてです。今、社会実験の話もちょっとありましたけれども。

【事務局（落石）】 今、ご質問の1点目は、多分、中央埠頭の物流機能を箱崎のほうにというご質問だと思うんですけれども、今、中央埠頭は、基本的に物流機能は持っていません。今、コンテナ等の取り扱いがございますけれども、それはカメララインという貨客船が釜山との間に1往復しておりまして、お客様を運ぶという機能と同時に、船に貨物も載せて物流をしておるということから、人流と物流が一緒になった機能の結果、あそこでさばいているということがございます。

カメララインにつきましても、ちょっと済みません、正確な数字は覚えておりませんが、毎年10万ないし20万人ぐらいの方を福岡・釜山間で運んでいただいておりますので、それを逆に、箱崎埠頭に持ってきますと、乗降客の方がCIQといいまいしょうか、出入国されるとき機能が落ちるという現状がございます。現在の計画の中では、カメララインを箱崎埠頭のほうに持っていくという計画はございません。

【小俣委員】 それはそうなんですが、倉庫とか見てくれのよくないところがございませぬ。ですから、ウォーターフロントというか、夢の港、世界一のにぎわいの港、アミューズメント的な港にするということ言えば、倉庫街とかも含めてあちらに持っていくということはいかないのでしょうか。

それと同時に、特区ということ言えば、CIQも特区で解決できる問題があると思います。今カメラは2往復できるはずなのに1往復しかできないのは、イミグレーションが夜できないということがあると思うんです。特区で市役所の職員の方とか、県の職員の

方が、C I Qができるようにしてもらえば、2往復できるから、別にフェリーの問題はちょっとこっちに置いて、むしろ旅客のにぎわいとかいうことと、もっと軽い物の往復で使うこともできるはずです。カメリアに今貨物があるからどうだではなくて、すべてにおいて、そこはにぎわいの町をつくるんだと、国際都市として福岡の一番の拠点をつくるんだというお考えもあってもいいのではないかなというふうに思うんですが、いかがでしょうかね。

【副市長（山崎）】 今のお話は、補足でご説明いたしました地域活性化総合特区、こちらのほうで、この国際ターミナルクルーズ受け入れ拡充と書いてあって、この中でC I Qのほうも要請していこうということでございます。

それから、港湾のほうの埠頭間の機能分担に関しましては、ページでいきますと、お手元の資料の11ページで先ほど港湾局からも説明いたしましたような配置を整然とやっていこうというのが今の考えでございます。今RORO船はアイランドシティのほうに着いているわけですが、これは箱崎のほうに着けましょと。貨物のターミナルと近いからということですが、こっちに移転しますということで、こちらは物流機能をしっかり強化して、最後の岸壁まで仕上げていくという形だと思います。

それから、中央埠頭の整備に関しましては、今回の補正予算で、暫定的に一部大型のクルーズ船に対応できるようにしたわけですが、ここをどうしていくかというのは、実は大きな課題でしょうから、これは今、港湾局のほうを中心にしまして、長期構想を検討中です。大まかに言うと、こういう形で国にもお示ししているわけなんですけど、この長期構想を港湾局のほうでしっかり考えていただいておりますので、今の小俣委員のご意見も踏まえて、港湾局のほうでご検討いただけるんじゃないかと思います。

【出口委員長】 C I Qというのは何なんでしょうか。

【小俣委員】 税関と入国と検疫が、夜できないものですから。

【出口委員長】 今はその三つの権限というか、業務が夜間できないけれども、それが特区になって、規制緩和あるいは権限が移譲されると、市や県のレベルでできるようになると。ちょっと手短に。

【事務局（落石）】 今、博多・釜山間がフェリーが片道6時間で行きまして、1往復で12時間、2往復で24時間で、1日2往復できるという趣旨でお話をされているんだと思うんですけども、貨物船の場合6時間であっても、もう一方貨物の乗りかえとか、人の乗り降りとかの時間がございますし、スケジュールをしっかりと守っていくためには、若

千の余裕の時間も見てないと運行できません。したがって、24時間で2往復するというのは、現実的ではないということを補足してご説明をさせていただきたいと思います。

【小俣委員】 カメリアだけだとそうなんですけれども、CIQを特区で国際的な港にするというのであれば、バルト海等で運行されている高速3胴船だと、高波の5～6メートルでも航行でき、博多-釜山間が3時間15分ぐらいで結べるんです。ジェットホイールと時間はあまり変わらず、フェリーだけではなく、旅客船で何往復でもでき、夜でもできるということになるんじゃないかという広範囲なお話でございます。確かにカメリアはそうかもしれませんが、そういうのもありますので。ジェットホイールがいいわけじゃなくて、古くなりますから。

【出口委員長】 そういう規制緩和だけではなくて、船の技術そのものの更新と組み合わせることが考えられないかという。

【小俣委員】 JRさんもそれを導入しようと、今考えておられますので。

【出口委員長】 そういうご質問ということです。

【事務局(落石)】 そういう具体的な計画が今現在ございませんので港湾局としてもそういう検討はいたしておりませんが、規制緩和の問題と、もう一つ、それを運航される船会社等の経営の問題の中で現実的にできるものか、できないものかということが、ある程度絞られてくるんじゃないかと思います。今現在、そういう経営をされたいというお話もございませんので、ちょっと済みません、それ以上、私どもお答えができないということではよろしゅうございますでしょうか。

【出口委員長】 結構です。市としてはまだ検討されてないということですね。

ほかに何かございませんか。質問ですね。

【トコ委員】 基本的な質問なんですけれども、国際戦略総合特区へ申請済みというのは、特区が認められると判断して話をしてもいいんでしょうか。あと、日本海側拠点港の応募済みというものの可能性と、済みません、お願いします。

【出口委員長】 いかがでしょうか。

【副市長(山崎)】 申請済みというのは、国にこういう案で出しましたよというところまでです。ライバルがいっぱいいます。その中で、国際総合戦略特区ですと、全国で5地区しか選ばれないということなんですよね。福岡だから選ばれるというものではなくて、ライバルに勝たなきゃいけないという状況です。

【トコ委員】 そのライバルというのは、どのぐらい……。

【副市長(山崎)】 ライバルはいっぱい出ているんですけども、大体三大都市圏とか、その他北海道さんも出しておられますので、なかなか福岡だからとっていただけますよという状態になって、今必死にお願いをしているところです。

【トコ委員】 では、これを前提にみたいなことで話は進めないほうがいい感じなんですね。

【副市長(山崎)】 もちろんそうです。我々としては、今こういう国の制度を活用していったらいいんじゃないかということで考えているということにして、一つ一つの考え方は、特区の指定を受ける、受けないにかかわらず、我々はしっかりやっていかなきゃいけないということです。

【トコ委員】 よろしく願いいたします。

【出口委員長】 そうですね。あくまでも、これは申請している段階ということですね。

【トコ委員】 わかりました。

【出口委員長】 伊東委員、お願いします。

【伊東委員】 先ほど小俣委員が言われた、客船のアメニティーの問題というのは、ヨーロッパでも東欧の変革に伴って、客船ビジネスというものが東欧からロシア沿岸部にまで至って非常に新しい展開を見せている現在、ぜひ考えていただきたいと思います。ほかのことでいいますと、このアイランドシティは、そういう意味では新しいビジネス、高効率なビジネス、そしてまた環境に優しいビジネスの誘致という視点から見て、47ページで説明されましたコンテンツ分野——デジタルコンテンツマーケットへの参入と、例えばアメリカのシリコンバレーのような知的産業を推進するという観点があるとするれば、コンテンツ分野のビジネス投資を誘致する、もしくは、そのシードをインキュベートするという要素をここに入れることも環境的な視点からも見て非常に可能性のある分野だと思えます。手元にある資料と先ほど説明されたものがちょっと違って、こちらには書いてないんですが、日中韓デジタルコンテンツ授業というものを市が発信しているのであれば、どのような内容であるのか、そして、先端産業誘致という点においてどのようなビジョンで、それをこれから建設的に考えていかれるのかということ、ちょっとお伺いしたいなというふうに思います。

【出口委員長】 いかがでしょうか。

【事務局(馬場)】 今日お配りしている資料の中の一つに、少し詳しいものがございまして、一番最後、これは市政記者のほうにお配りしたときの資料でございますが、日中韓

デジタルコンテンツ共同授業というものでございます。記者会見資料をそのまま皆さんにお配りしている状態でございますが、お手元におありでしょうか。

この中身でございますけれども、福岡市は都市機能とか魅力を高めるためにデジタルコンテンツに着目しております。あるいは大学の集積、特に九州大学の芸術工学研究院とかでデジタルコンテンツはかなり盛んでございますので、世界最先端の研究開発などを充実していきたいという考え方が基本でございます。あるいは人と投資を呼び込むためにコンテンツを活用を考えていくことにしています。

そういう中、九州大学のほうで、日中韓の人材教育ということで大学院レベルの学生を相互に派遣する形で、総合的な高度人材育成をしていこうという考え方をもちまして、その実証として、今回日本に呼ぶという形で行っています。アイランドシティに中国と韓国の学生さん、あるいは早稲田大学とかの学生さんが来て、一緒に授業をしてみようということで、九州大学の機材とかを使いながら、共同研究、共同授業の試行といえますか、そういうのをやってみようという試みでございます。

【出口委員長】 よろしいですか。

【伊東委員】 お聞きした視点では、あくまで学術的な、という側面を示されているのかというふうに思いますけれども、以前、阪神・淡路大震災のときに、神戸にこのような学術的なものプラス、アジアのこれからのクリエイティブな市場と人材を日本に引き込むというプロジェクトを阪神淡路震災復興機構、経済産業省、兵庫県がおこし、委員長として、私もその策定にかかわったんですが、大学院レベルで交流し、人材、産業基盤的に日本のコンテンツを海外に普及させるシードとなる新しい教育とコンテンツ流通システムというものを策定したこともあります。

今、アジアではメディアコンテンツ事業というのが、研究、開発だけではなくて、マーケットとしても非常に整備されつつあって、ビジネスとしてここに投資を呼び込むということを主眼に、これからの違う構造のビジネスを博多の中で、福岡の中で展開させたいという意味では、学究を主体とするとしても、もう少し戦略的に先端ビジネスにフォーカスした事業を立ち上げる必要があるのではないかと思いますし、そのようなマーケットに対処する面を、これからの福岡としても新しい産業基盤の一つとして持つことが非常に重要じゃないかと思いますので、このアイランドシティで、ぜひそこまでの広がりを持つ事業を考えていただきたいなというふうに思います。また、以前からお話ししています、コンベンションセンターとハイブリッドしたメディアセンターも改めて提案したいと思います。

【出口委員長】 今のはご意見として承って、もし、よろしければ後半部でまた詳しく補足していただければと思います。ほかに質問をお受けしたいと思います。ご意見は後半でいただきますので、補足を求めるような質問がありましたら、お願いしたいと思いますが、よろしいですか。

そうしましたら、一たん休憩に入りたいと思います。今、山崎副市長のほうから、市の実態についての説明がありました。やや、頭が痛くなる、後半で、私どもの口が重くなるような感じもしますが、総じて申し上げますと、私の印象としては、福岡市は、政令市になってから幾つかのイベントを打ちながらインフラ整備や施設整備を行ってきて、どうもその借金の返済に今追われているということですね。あと、人口増加に伴い、さまざまな公共施設を高度成長期から整備してきて、その老朽化の対応に追われるようになってきた。さらに、また人口そのもの高齢化が進み、福祉あるいは扶助等の予算が膨らみつつあるという二重苦、三重苦の中で、このアイランドシティの計画を二十数年前から立ち上げ、推進していかなければいけない状況にあるということで、悪循環に陥ってきている。それを好循環に転換していきたいので、そのためのアイデアや知恵をフォーラムのメンバーの方に出していただきたいというご趣旨かと思います。是非、そういうことで後半戦のほうをお願いしたいと思います。

では、3時5分に再開いたします。

(休 憩)

【出口委員長】 それでは、休憩時間、予定の時間を終わりましたので、再開させていただきます。

皆様からご意見をいただく前に、前回、貫委員から宿題として出されておりましたサイバー大学がアイランドシティに立地していますが、それに関してのご質問がありました件に対して、簡単に口頭でお答えしていただけますでしょうか。

【事務局（猪上）】 経済振興局産業政策部長でございます。

前回の委員会で、サイバー大学の経営状況についてのご質問があったということでございます。

ご承知おきのよう、サイバー大学、昨年の7月以降、ソフトバンク株式会社の100%子会社に経営が変わっております。当初より厳しい状況であるというのは変わらないんですけども、世界遺産学部の学生募集の停止や、そのほかコスト削減等により赤字幅も相当改善しつつございまして、26年ごろには単年度黒字になるのではないかという見込み

でございます。

今後とも安定的な経営が行われますよう、我々福岡市のほうも注視しながら、必要に応じた指導をやっていきたいというふうに考えております。よろしく申し上げます。

【出口委員長】 よろしいですか。

【貫委員】 経営状況があまりよくないのはよくわかっているんですが、ただ、あれは非常に夢のある大学としてスタートしたのに、なぜこういう格好になっているのか。あるいは、今後、花開く可能性というものはないのかですね。今日じゃなくてもよろしいんですけれども、そういう趣旨で申しましたんで、そういう回答がもし今後できればお願いしたいと思います。今日でなくてよろしゅうございます。

【出口委員長】 何かございますか。

【事務局（猪上）】 いや、ちょっと今日は。持ち合わせません。

【出口委員長】 そうですね。なかなか厳しい状況で。私も実は客員教授をしております。学部が少し縮小されたりしております。

【貫委員】 私もあそこは経営に一時タッチしてまして、ちょっと知っていたもんですから。

要するに、非常にいろんな規制の中でちょっとうまく動けずに力が発揮できなかったという面があるようなんで、おもしろさをうまく生かしていけばいいのかなという気がしたもんですから。

【出口委員長】 ありがとうございます。

それでは、議事に入りたいと思います。後半部は委員によるフリーディスカッションということで、皆様からご意見をお願いしたいと思います。

予め、私がA3の用紙を用意いたしましたけれども、決してこれにこだわるわけではありません。皆様のご意見をまとめ、柱を立てていくと、こういった七つの柱になるかと思い、つくってみたのですが、改めて今見ますと、非常に堅苦しい言葉ですね。時々、私が行政用語として批判するような言葉を自ら使っていたりして、わかりにくかったりします。私もセンスがないもんですから。決して、これにこだわるつもりはございませんので、何なりとお話をいただきたいと思います。

左側のほうが理念、構想、未来像の話、まちづくりのテーマ。あるいは、安全で、住みたくなるまちとはどういうまちかというイメージ。あるいは、具体的なブランド化、ブランドの創造、そういったことについてのご意見をさらに補強していただければと思ってお

ります。右側のほうが具体的なそのための方策、方法、施策についてです。最初、よろしければ左側の枠について、ご意見等いただければと思っております。

まず最初に、今日、わざわざ資料をつくってきていただいておりますアイランドタワー自治会の森委員から、自治会の意見をまとめてきていただいております。こちらのご説明をお願いいたします。

【森委員】 いろいろときれいにまとめていただいた市のお話を聞いて、だんだんトーンが下がってきたんですが、この場ではこれからトーンを変えていきます。私は今日、ペーパーを1枚用意しましたが、住民とか私の娘とかに、このペーパーを見せましたら、わくわくするやんという感じで受けとめてもらっていますので、できっこないとか、そんな発想ではなくて、やろうと思ったら、どこをやったらいんだという考え方で読んでいただいたらいいんじゃないかなと思っています。

まず初めに、お礼のほうを先に申し上げたいと思うんですが、安藤委員には直接、タワーの方まで来ていただいて、訪問チェックをしていただくなりして、実際にトップが行動を起こしていただいて、住民に大きな安心を与えてくださいました。さらに、大庭委員には、今週月曜日から木曜日にかけて、夜のラジオ番組でF I C発信という形で、具体的な情報発信をしていただきました。お二方に厚く御礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。

今日、ここにペーパーを出しましたが、一応、アンケートをとっている最中に住民のアイデアという形で、いわゆるF I Cを考える会を2度やりましたし、タワー団体のヒアリングをやりましたし、個別の提案もいただきましたし、うちには35世帯の海外の居住者がおりますので、国際ヒアリングも少なくともやっております。数的には少ない状態ではありますが、一応、住民のアイデアということで、住民としての参加意思ですということをご理解いただきたいと思います

タイトルについてはいろいろと悩み苦しみました。最終的に、「環境未来都市 福岡アイランドシティ（F I C）—自然と共生できる文化エコタウン—」という形でまとめてみました。

これを委員会が終了に当たっては、ぜひ国内外へメッセージを発信してほしいと思います。そのためには、最近お亡くなりになりましたけれども、もったいない運動の提唱者であるマータイ女史の意思を継いだ方々とか、あるいはもとに戻せないものをつくらないでくださいと訴え、伝説のスピーチとして有名な12歳のセバスチャン・スズキさんとか、

さらには、その彼女の演説を聞いて最初に握手をした、ノーベル賞あるいはアカデミー賞をもらったゴアさんとか、自然エネルギーの財団で理事長に就任されましたスウェーデンのエネルギー庁長官トーマス・コバリエさんとか、こういう方々の、要は、質の高い環境未来都市とは一体何なのかという形のイベントあるいはそういうメッセージの場を設けていただいて発信していただければ、市民含めて大変な方向に向かっていくのではないかなと思っています。

夢プロジェクトの取り組みを細かく説明はいたしません、プロジェクトの準備として、F I C住民が企画段階から参加できるような仕組み、そのための心臓部として、ふるさと防災防犯本部を兼ねた会館の設置、並びにまちのマネジメントができるNPO、これらができ上がるまで、ひとつ市のフォローをお願いしたい。

さらに、アイランドシティは2校区という形をとっていると思いますが、それを1校区にして、諸課題、あるいは夏祭り、将来的にはそこに書いているような、みなとエリアでの企業祭り、海上祭りイベント、そういったものの企画がスムーズに流れるようにしてほしいです。

あるいは、人口構成バランスが悪いところがありますが、そのバランスの是正に千葉地区では取り組みが進んでいると聞いておりますので、この辺は平山委員のアドバイスを受けていきたいと思えます。

具体的なプロジェクトは、「自然との共生プロジェクト」ということで、野鳥公園をとにかく早期開園をしていただいて、デザイン性のすぐれた児童中央会館、県の図書館等などの施設が入っていただくことをお願いしたい。

さらには、100メートル幅のグリーンベルトの両側には桜並木にする。今は緑が非常に多いのですが、いわゆる彩りが無い。そういう意味で、桜並木をお願いしたい。また、緑の樹木の成長のためには、防風林、防潮林というものも考慮し、緑による木陰づくりをぜひ出してほしいし、周遊海域はエコパークゾーンで、H25年遊歩道が完成しますが、これはある意味では日本初のユニークな散歩道になるので、広域な観光、健康観光ゾーンという形で開発していただければと思います。

さらに、5番目には、F I Cに、道の駅ならぬ島の駅という形で、青果市場、あるいは志賀島漁港の素材を使ったレストランを展開していただきたい。6番目のカーシェアリングでEVの普及では、相当数の駐車場台数を確保が必要だし、駐輪場の確保も当然必要でしょう。今、山崎副市長がお話になった島内のカーシェアリングでのEVの発信と普及に是

非、力を入れていただきたい。

7番目の交通機関は、私どもの校区ばかりではなくて、対岸の校区も地下鉄の延伸を望んでいますので、そういうところの声もしっかり聞きながら、大量輸送機関を考えていただき、かつ海に囲まれた地形を利用して、海上バス、例えば志賀島とか能古島とか、そういうところも高齢化しているという話を聞いておりますので、そういうところへのシーバス網づくり、ボートエリアづくりもぜひ考えていただければと思っています。

もう一つはプロジェクトは、教育・健康・国際・エコ複合プロジェクトです。

8番目の教育機関として、小中一貫教育は、ほんとうに効果を出しておりますし、住民からも大いに賛意が得られております。高校の新設は難しいと聞いておりますが、これからは高校の移設なり、あるいは国際学校の誘致なり、大学もしかりですし、そういうことも考えていただきたい。また、体育及び健康をベースにしたスポーツ医学や予防医学に力を入れていくことになるのではないかと考えています。

9番目は、3行目に書いていますが、震災による中央政府分散の受け皿として、名古屋、大阪、福岡有力と新聞で報道されていますから、ぜひそれにもF I Cが名乗りを上げながら進めていただきたいと思います。

それ以外に、外に転じたときに、市内にあるハビタット国連機関に続く国際医療福祉機関とかアジア・太平洋観光交流機関などの誘致、また、戦争による紛争解決じゃなくて、和を尊ぶ日本の気質を前面にだした国際調停機関の誘致とか、こども会議も20年のキャリアを持っているわけですから、そういう新機関の設立なんかも考えていただくといいんではないでしょうか？

10番目に、そういう機関が誘致されてくると、あるいはこども病院が開設されると、夕日のスポットのあるF I Cで、多少なりともホテルというものの選択も十分考えていただければと思います。

最後に、スマートタウン構想ですが、藤沢市のイメージですが、企業の選別と、効率的・効果的な企業チームの編成をしながら推進していただき、先ほども煉瓦建物のお話がありましたけれども、省エネ・創エネに福岡市として頑張っているわけですから、先端技術のイベントを常に発信しながら、スマートタウンの実現に向けて、ぜひ努力していただければと思います。

福岡市の力、行政の力というのは凄いものがあるというふうに、今、お話をずっと承ってもわかりますので、ぜひ、さらなる力を発揮されて、夢に向かって邁進していただければ

ばと思っております。ありがとうございました。

【出口委員長】 どうもありがとうございます。かなり夢のあるお話を、地元の方々でご相談して、まとめていただきました。

具体的なプロジェクトについてのご提案もごさいます。何かこれについてご質問あるいはコメントなどごさいますか。いかがですか。

どうぞ、大庭委員、お願いします。

【大庭委員】 先日、森委員とちょっとお会いして、こういう考えがあるんだ、どうだということをお聞きしたんですけども、実際に4,500人の住民が住んでおられて、要望——これ、森さんにもお伝えしたんですが、非常に難しい部分もありますけど、夢のある計画というのはいんじゃないですかと。あとは、これから先、進めていく中で、具体的にまず何ができるかと。

出口先生からまず「21世紀の展望と福岡の将来を見据えたアイランドシティの「未来像」の構想」とあります。ただ、その前に、まず、森さんたちがおっしゃるように、「F I C」という名前を定着させる、これがまず一番じゃないかなと。

今週の月から木まで、一応、自分のRKBのほうの夜の遅いので、11時25分から25分間、大体、皆さんお眠りになっとう時間帯なんですけど、これで「F I C」というのを徹底的に言いました。だから、今住んでおられる方が人工島と言うのはやめてくださいと、これも何度も言いました。

これからまた話進んでいきますけれども、来月の、11月21日から24日の4日間——収録は前の週の木曜日にやるんですけど——、森委員にゲストで自分の番組に出ていただいて、いろんな部分のことをアピールしていただきたいと思います。

福岡市の職員はすばらしいということもちゃんと言うております。というのは、みんなで一緒に前向きに進まないかん。ただ、現実的な問題はこうだという話もしています。それと、アイランドシティの安全性については、ほんとうに私もすごいなと思っているんで、これについてはしっかりアピールしております。

そこら辺も含めて、今からどんどん話進めていく中で、住んでおられる方のことをまず考えながらやれたらなと思います。

以上です。

【出口委員長】 どうもありがとうございます。11月に4日間ですね。

【大庭委員】 はい。11月21日から24日までです。これもう、プロデューサーと

ディレクターにも許可取って、もうちゃんと決まっております。

【出口委員長】 ありがとうございます。既に、このフォーラムがきっかけになって、そういった広報活動というか、メディアを使ったアピールが始まったということですね。

【大庭委員】 まずアピールせんとですね。だから、F I Cというのも定着させたいと思います。

【出口委員長】 ありがとうございます。

【海老井委員】 関連していいですか。

【出口委員長】 海老井委員、お願いします。

【海老井委員】 今、森さんから提案されたものですね。ほんとうに、こういうまちなったらいいなということを思いつつ、そして、皆さんもそういうふうに思いながら、これまでいろんなアイデアとかプランとか出してこられたんじゃないかと思うんです。一つまとまった形で提案され、まちのイメージがわかるような提案でいいんじゃないかなと思っております。

ただ、私もずっと夢のようなことを語ってくださいということで、語ってきましたけれども、内心ですね、福岡市の財政状況とか、それから今の経済情勢とか、いろんなことがおおよそ予想がつきますので、大丈夫なのかなと思いつつ、夢を語ってきたところがあります。そして、今日また、福岡市の財政状況とか、これまでのまちづくりの経緯とかを説明していただいて、納得する部分が非常に多いと同時に、ちょっと暗い気持ちになったということもありました。

でも、その上でやらざるを得ないし、やっていくしかない、これだけのすばらしい構想をもとにやっていくしかないという。今、放送とかで流していかれるということですが、行政としても、これを打ち出してもらいたいと思うんですよね。

市政だよりとかいただきますけれども、普通、市民の方が市政について得られる情報というのは、市政だよりと、それからテレビとか新聞とか、そういったところじゃないか、議会なんかにはあまり足を運ぶことはないんじゃないかと思っておりますので、そういう意味では、今、アイランドシティがどうなっているのか。一般の人たちから見ると、どちらかという問題があるときばかり大きく書かれるようなこともありますし、過去の問題もあって、それほどいいイメージを持っていない。いつまでも何か、福岡市にとっての重荷になっているというイメージを持っている方も多んじゃないかと思うんですよね。

だから、今、アイランドシティ構想、こんなにすばらしい未来に向かって、まちづくり

構想を進めているんだと。そして、今、ここまで来て、これからこういうふうを持っていくんだ。財政厳しいけれども、選択と集中によって、これは福岡の将来の発展の原動力になるような場所になるんだということを、行政のほうでばしっと、市政だよりや新聞とかで特集ぐらい組んで、打ち出して、そして、市民の方の大きな理解というんですかね、それをもとに、合意をもとに進めていかないと、この厳しい中ではいろいろと一つ一つのところで批判が出たり、問題提起されたりするんじゃないかと思います。

【出口委員長】 ありがとうございます。こういった新たな財政支出を伴うような場合は、世論形成は非常に重要で、そのために市政だよりということもおっしゃってましたけれども、いろんな方面からのアピールなり、あるいは市民の合意形成が必要だということを強調していただいたと思います。

おそらく、皆さん、今の夢のあるお話を伺って、ほんとうにこういうまちができたらいいなという住民の方々の切実なる夢というか、ご希望として受けとめていると思いますが、一方で、この議論をされたときに、例えば、財源でありますとか、あるいは地元の方々がこういうことに対して、例えばどういうことができるんだろうかという点を議論されたでしょうか。例えば、行政の場合、施設をつくるのは案外予算がつくんですが、その後のメンテナンスや運営の経費は、結構負担になります。そういう点で、地元の人たちにどれぐらい負担をしていただけるのか、あるいは協力していただけるのか。そういうことも財政的な負担軽減につながっていくと思います。そのあたりについては何かご議論されていますか。

【森委員】 負担の話はしていません。ただ、実際に今住んでいる方々は、このままでいいと言われる方もいる。箱物とかいうイメージではないですね。この自然をとにかく大事にしていってくれたらいいという意見も聞きます

一方、利便性のところを大きく言われる人もいますけれども、逆に、今、歩いていけるようなところで、それって、あんまり不便というイメージではないという声もあります。

財政負担という話では、交番のお話で安藤さんからお聞きしたお話などいろいろ申し上げたときには、そうなんだと、そういうお金が要るんだという感覚で受けとめておられます。だから、必ずしも大きなビルが欲しいとか、そういう話ではないと思います。手づくりで、何か周りに影響を及ぼすようなものです。それはある意味で住民の結束だと思うし、出口委員長の今やっておられるところを大いに真似していきたいなというところがあります。

【出口委員長】 村田委員、どうぞお願いします。

【村田委員】 先ほど、公共投資をした後に住民がフォローするか、何するかということでお話がありました。

昨日、ツール・ド・フクオカのキックオフパーティーというのがありまして、私、自治会代表として出てまいりました。そのときに、青年会議所の人から言われたのが、自転車が最後ゴールするまでの間に住民で輪をつくって、何かウエーブみたいなのをしてくれないかということだったので、ああ、いいですねとか言って、自治会としてもいろいろ協力したりして、何かやっついこうかとかあるんですけど、自治会としては、まだどういう計画があって、それに対してどう参加するという形はないけれど、おそらく、そういうことに関して企画があれば、それに参加していくような形は、僕たちもとっていかなきゃいけないのかなと思います。

今、お話をいろいろ聞いていると、まず、未来像として、一つが環境とエコの話、一つは健康と医療の問題、あと国際交流、この辺が大きなテーマで、大きなテーマはテーマとして先に進んでいなくて、今日、お金がないというお話まで伺いまして、さあ、どうするかということ。

今のツール・ド・フクオカの話に関連づけてお話しするんですけど、イベントの内容としては自転車を使うものです。僕自身も天神からアイランドシティまで自転車で通勤しているんですけど、通勤圏内なんですよ。そういうエコ的なことだったり、健康増進ということであったり、あと国際選手もいろいろ来るんで、国際交流と。ちょうどアイランドシティの将来的なテーマにも見合ったイベントなのかなと。こういうイベント自体はすごい公費がかかるようなものではないと思いますので、こういうのをどンドン誘致していただいて、来てもらいたいなど。

今回、ツール・ド・フクオカは七、八千人の人が来るらしいんですよ。七、八千人の方がとりあえずあそこに来ることなんですよ。来るということは、見てもらうチャンスなんですよ。見てもらうチャンスで、皆さんがアイランドシティを見てどう感じられるか、ここが大事だと思うんですね。既にもうアピールのチャンスの中ではあるかなと思います。

この1カ月、2カ月で動いてどうなるものではないと思うんですけど、アピールできるチャンスの際に、ああ、アイランドシティってすごいいいじゃんみたいな感じが出てくればいいと思いますが、果たしてどうかなと。

そのように魅力をアピールするチャンスなのですが、どんな魅力があるか。アイランドシティ中央公園のほうで開催されるわけですが、すごく広くて、遊具施設もそろって、気持ちのいいところです。しかし、外からわざわざあそこに何を目指して来るかという、まず遊具施設なんですね。だから、1歳から大体小学校低学年ぐらいの親御さんたちがあそこに連れてきて遊ばれるというのはあるんだけど、結局、いろんな人を呼び込んでということまでにはつながらない。そこをつなげるためにはどうしたらいいかというと、植物的なものでアピールしてもいいんじゃないか。春は何、夏は何、秋は何、あそこに行くとか何か四季とりどりの何か魅力があるよという魅力発信ができるのかなと。あそこで、もし今後そういうイベントをどんどんと連ねていくと、そのたびにいろんな人に見てもらえるチャンスになります。その際、ああ、きれいなところだなと、毎回、感じていただければ、また、まちのアピールになるのかなと思います。

済みません、ちょっと話がそれるんですけど、バスの利便性に関してです。私、個人的に、住民からの嘆願書を持って、西鉄バスさんのほうに行きました。実は現在ちょっと減便になっているということで理由を伺ったんですけど、聞いてちょっと暗くなりました。1便当たり大体4人ちょっとしか乗っていないと。すべての便の平均ですよ。そういうことで、一たん2年前にちょっと増やしたんだけど、その後、それ以上増えていないから、また減便になると。

先ほどEVバスのお話が出て、EVバスというのがアイランドシティから千早駅まで結ぶ路線の一部で走ってるんですけど、あそこもすごい赤字路線みたいで、それはシャトルバス運営委員会とかお金を補てんしてやっていると。結局、バスの増便とか、そういうことがアイランドシティの発展の引き金になるんですよというふうな話をしたんだけど、今度は逆に、発展したら増やせますよと。もちろん向こうも商売なんだろうがないんですけど、じゃあ、どうしたらいいですかと言ったら、補てんがあればいけますよと。ああ、そうですかといったふうな会話で、そこでとまっている。

結局、住民の意見をいろいろまとめて、早く公共施設をばんばん整備してやったら後からついてくるんじゃないかとか、ここで言われたようなこともいろいろあるんですけど、どちらにしろ、お金を使うのであれば、早目にまちが完成するしかない。開発する期間は無駄なお金になるでしょう。

だから、今のセンター地区と言われるアイランドシティ全体の南東部分というんですか、あそこを一たん早く完成させて核をつくってしまうということを急いでやるべきじゃない

のかなど。あそこの早期の完成ということは、皆さん共通に望まれていることなので、その辺大事なのかなということです。

以上です。

【出口委員長】 ありがとうございます。

ちょっと整理します。今、村田委員が言われたことですが、まず最初にツール・ド・フクオカの例を出されて、とにかくブランド構築もまず活動からですと。とにかく活動をやって、活動を集めていく、その活動を最終的にまちの魅力アピールにつなげていくというスタンスで進めていくと。

それに、さらに、アイランドシティの自然環境の魅力を楽しむ、楽しめるような戦略を立てると。季節ごとの自然を楽しむような場の設定とイベントの企画とをリンクさせ、それによってまちの魅力のアピールしていく、そういう戦略を立てるということを言われました。

これはおそらく、私のメモの左下の論点4の「まちのイメージとブランドをどのように構築していくか」ということにつながるアイデアを言っていたのだと思います。

それから、もう一つは、EVバスの導入について、おそらく初期投資として、まず補てんが必要だと。それは立ち上げの部分がある程度、公共投資としてやっていただく必要があるということです。利用者が増えて、定常的に採算性がとれるようになった時には引き上げていいのですが、最初の立ち上げの部分は公共投資をやるべきではないだろうかというご意見と思いますが、それは論点の5につながるアイデアかと思います。

それから、センター地区の話が出ました。早くセンター地区の核をつくっていただきたい。商業、業務、あるいは公共施設が入るかもしれませんが、その核をつくっていただきたい。ところが、前回、積水ハウスの方が来ていらっしゃいましたが、今こういうご時世なので非常に苦しい立場だということで、まちづくりのほうをまず先にきちんと行政のほうでやっていただきたいという要望を出されておりました。あと、土地代が相対的に高いので、それが初期投資の事業負担になっていて民間事業が出てこれない。それがおそらくセンター地区の整備になかなかつながりにくい、ボトルネックになっている。その部分は、土地代を相対的に下げていくためのいろんな政策を出していかなければいけない。それは、おそらく論点6のところにつながっていくのだと思います。この辺は平山委員やご専門の方々にまたご意見をいただきたいと思っております。

それから、海老井委員が言われたアピールの話もありますが、海老井委員は県の副知事

でいらっしやいます。先ほどの資料ですと、県は福岡市の埋立地から約40億円の税収があり、福岡市の約半分近い税収があります。これをどういうふうに県として評価されているのか。あるいは、県としてのこの地域のまちづくりにどのようにかかわっていかれて、また税収増につなげていくことができるのか、そのあたりはいかがでしょう。何かございますか。

【海老井委員】 どちらかというところでは疎いんですけども、ただ、福岡県にとって福岡市というのは、行政は各々に担当していますが、切り離せないですよ。福岡市と福岡県は、強力でタイアップして、一体的にやっっていかなないと、絶対に福岡県全体の発展はあり得ません。福岡市は何ととっても福岡県の中心、顔です。玄関口です。そういう意味では、福岡市が発展するために一緒になってやっっていかなければいけないというのは基本的なことであると思っております。

【出口委員長】 そうですね、もう基本中の基本ということです。どうもありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。どうぞ、土屋委員、お願いします。

【土屋委員】 今日は、財源の説明があった後、かなり厳しい雰囲気は漂っているわけですけども、これは福岡市に限ったことじゃなくて、日本全体が国債が世界一多くて、それをどう今後やっていくのかという問題を抱えているわけで、国全体の問題にもかぶっていると思うんですけども、今日の参考資料の33ページでいきますと、一般財源の推移というのが少しずつ下がっている、今後とも大幅な増加は期待できないと書いてあるんですけども、一方、社会福祉の費用がかかっている、これは自明のことなわけですね。

ですから、都市戦略として重要なのは、財源をいかに伸ばすかで、今後期待できないというシナリオでは、なかなか思い切った未来像は描けないと思うんですね。

だから、財源問題、税制問題、そういうところまで踏み込んでシナリオを描かない限り、明るい未来像というのは、全部お金のところでつまずいてしまうと思います。民活も含めて、どういうふうにお金をこの地域で稼いでいくのか、これがキーポイントになると思います。

アイランドシティだけでは解決できません。福岡の強みを強調して、人、物、金、情報をいかに集めるか、そこでどれぐらいのお金を今以上に落としてもらうか。それが税収なり、地域のお金として使える形で残っていくのか。そういう大きなシナリオから描いていかないと、夢ばかり描いても、結局はお金のところでつまずいてしまうと思うんですね。

アイランドシティの位置づけというのは、私が2回目でしたか、ご提案しましたけれども、真っさらに近い、非常に都心に近い、しかも、環境抜群のエリアがあって、そこに、よそから人、物、金、情報が集まる仕組みをいかに我々が描くか、これにかかっている。おまけに、今、国際戦略特区ということで、税制面も含めた規制が、ある意味、取り払われる可能性があるということですから、これを活用して、そういう財源を含めたシナリオをいかに描くかということじゃないかなと思っております。

ですから、財源のところで大幅な増加が期待できないとなると、もう夢が描けなくなるんじゃないかというふうに思うんですね。

今の一般財源の中身ですけれども、市民税とか住民税とか消費税の一部とかあると思うんですが、そういう税制の今の構造も、一度フリーに考えてみる。今どんどん成長している国、たくさんあります。特にアジアの小国がものすごく今、元気あるわけですね。この間、ご紹介した台湾もそうですし、香港、シンガポール、マレーシアもそうです。そういうところがどうやって、ほかの地域から人、物、金、情報を集めているのか、どういう制度設計をしているのか。それらを参考にし、我々はもっとそれ以上の、それとは競争力のある強みを持っていると思いますので、そういうものを強化して、仕組みを描いていくというのが、アイランドシティに限らず、福岡に課せられた課題かなと思います。福岡ができなければ、おそらく、東京以外の日本の地方でそういうシナリオが描けるところはないんじゃないかなというふうに思っております。

ちょっと意見になりましたが。

【出口委員長】 ありがとうございます。

少し考え方を。では事務局から。

【事務局（貞刈）】 今、土屋委員さんの話、それから先ほどの海老井委員さんの話について、ちょっと補足をさせていただきたいと思います。資料がちょっと暗い資料になったりしていますので、そういう意味で、ちょっと補足をさせていただきます。

資料の中の34ページのところに市民1人当たりの市債残高が2番目ということがあります。これは1人当たりの借金みたいなもので、確かに2番目ではあるんですけども。ちょっとこの表と、その次のページの35ページの表を見てください。これはちょっとものが違ってまして、34ページの表は全会計といいますか、いわゆる企業会計とかも含めた市の全会計の借金です。それから、35ページは一般会計の借金をベースにしてつくっている資料です。

何が言いたいかといいますと、全会計のほうには、いわゆる上下水道とか地下鉄とか、大きなインフラの分が入っています。それについては、基本的に利用者の料金とかで戻していくということでございますので、そこが違います。それが企業会計のかなり大きな部分を占めております。残りの部分が一般会計になりますので、その一般会計で、いろいろな道路とか市民のいわゆる公共施設、その辺をつくることになります。その辺の借金になります。

当然、いろんな大きなイベントとかすると、それに関連して道路をつくったりしますので、その辺で道路整備が進んだとかいうことがあります。

それから、今はそうでもないんですけども、20年、30年前の福岡市は、とにかく早く都市計画道路の整備率を高めろとか、早く下水道を普及しろというニーズが非常に高うございまして、そういう結果としてこういうふうになっている。決して、無駄なものをつくっているとか、イベント行政だけで借金をふやしたとか、そういうことではございません。しっかりした市政をやってきたんだと私は思っております。

そういう起債の、借金の額だけ見ると大きいなということになるんですけど、一方で、予算の編成をするときには、福岡市の場合は、きちんと一般の財源の中にきちんと投資する財源が確保できます。これは、さらに更新していく、新しい分野にも投資をしていく、そういう余力はあるという意味で、これはまだ全国の市の中で見れば恵まれているんじゃないかと思えます。

ですから、海老井委員が言われたように、決して楽ではないけど、いかに資源を選択と集中で効果的に使っていくかが大事で、ご発言どおりだと思っております。

土屋委員さん言われたように、私も先日、台北に行って、いろんな向こうの今の事情を聞かせてもらいました。非常に厳しい中で、中国を中心としたアジアの成長のエネルギーをいかに取り込んで、自国を維持発展させていくかに、非常な危機感の中で取り組んである。そういうことでございますので、確かに、資料的には、財源の伸びは期待できないことになっておりますけれども、その辺については、今、新ビジョンもつくっております、いろんな各界のご意見も踏まえて、特に福岡市の都市戦略というのをどこに求めて、どういうふうに集約していくか検討しているところです。

そういうところで、市全体としての成長の戦略というのは、別途、しっかりつくってきたい。その中で、アイランドシティを位置づけ、できるだけのことをやっていくと、やれることをやっていくという考え方でおります。

【出口委員長】 ありがとうございます。

よろしいですか。少し、考え方の整理をしていただきました。

【副市長（山崎）】 今のお話は、42ページのお話ですね。土屋委員がおっしゃったように、いかに高循環にしていくかという。総務企画局長が申し上げたような状況があるんですが、その中であって、どうやって成長をしていくか、その中でアイランドシティをどう位置づけていくか、高循環を導き出すということについて、ぜひご議論いただきたい。

事実、その結果として、先ほど話題になりましたとおり、埋立地から税収が福岡市に約80億円、県には40億円という、大きな新しい財源をつくっているわけですので、こういう新しい財源を使って成長戦略を実現していくというのが一番いい循環であろうというふうに考えています。何か私の説明は若干暗い話が多いような印象を持たれたかもしれませんが、実はここが一番大きなところであるというふうにご理解いただければと思います。よろしくをお願いします。

【出口委員長】 ありがとうございます。是非、高循環をつくるシナリオで。

【増山委員】 今のお話の関連なんですけれど、お話にあったように、プライオリティーをどう考えるかということだと思います。福岡市には、アイランドシティもあるけれども、もちろん博多、天神もあるし、百道もある中で、どれだけこの地域にプライオリティーを持って公共投資を入れていくのかという話のような気がします。

いろんなプロジェクトを考えるときも、費用と便益をどう考えるか。短期じゃなくて中長期でいいと思うし、この地域だけで考える必要はなくて、もっと広域的に考えればいいと思うんですけれど、夢のあるプロジェクトをやっていくと、税金を投入するということに当然なるので、そういう中で、この地域が福岡市にとって、あるいは福岡都市圏にとって非常に重要な、プライオリティーが最も高いぐらいの土地だという位置づけが必要なんじゃないかというふうに思います。

【出口委員長】 ありがとうございます。福岡の中でもプライオリティーが高いという位置づけのシナリオを考えていくということでございます。

大庭委員、お願いします。

【大庭委員】 山崎副市長の話は、別に暗い話じゃなくて、ほんとうの話でありましてね。だから、その中でどうしていくかということだと思うんですね。

村田委員がおっしゃっていたように、これから先のことを考えながらですけども、前回の委員会でも言いましたように、まず陸路ですね。それと、西鉄さんとの価格交渉は福

岡市の方がやられるわけですからあれなんですけれども、ちゃんとした話ができれば、営業所の移転というのを西鉄さんは言っているわけですから、そしたら始発ですから、何人乗ってしようと一緒なんですわね。

前回の海老井委員は欠席でございましたけれども、都市高の延伸とかいうのは県からお金を随分出してもらわなくちゃいけないんで、これはほんとうに県と市とで協議をお願いします。これはアイランドシティだけじゃなくて、天神や博多駅などトータルでの話になりますんでね。

まず住んでいる人たち、それから今からここで仕事する人たちのための足をきちんとつくらないといけません。そういう話になれば、スーパーとかいうのは、わりと早くできると思うんですよ。

それと、イメージ的には、まちづくりの中で、伊東先生とも随分前に話したことがあるんですけど、森委員からこの前お話聞いたら、これは構想でどうなるかわからんけど、香椎宮を浜宮みたいなものを持ってこれんかということがあります。櫛田神社でも浜宮が一つ、港のところにあるんですね。お宮というのは、一つの大きな、何といいますか、人が集まる際のシンボルみたいなものになるんじゃないかなと思います。そういう発想で、ハードの中に、ソフトといいますか、心の部分というのが入っていけば、ほんとうのまちづくりにつながるんじゃないかなと思います。

あとは、さっき言いましたけれども、自分の深夜のラジオだけじゃだめなんで、毎日新聞の岩松編集局長にも、毎日新聞のほうで、住んでいる人の記事を扱ってくれという依頼をしております。RKBのテレビのほうの報道記者にも言っているんですけど、いろいろありますので、らちがあかなかつたら、来月、永守社長と、九州フォーラムというので一緒になった際に、扱ってくださいという依頼をします。あと、トコさんにしても、いろんな方が前向きにこのイメージ——F I Cですよ。人工島って絶対言っちゃいけない。F I Cで通しながら、そういう形でやれたらというふうに思っております。

【出口委員長】 どうもありがとうございます。

伊東先生、お願いします。

【伊東委員】 全くのそのとおりだと思いますし、今、ブランドの創造といいますか、魅力の創造という意味では、私がすばらしいなと思いましたが、森委員から発表があった中間提言の中に、地域のイメージづくりという点が強く出されていたことです。全体のイメージづくりというのは、これからのアイランドシティの将来を非常に左右するもので

あって、個々の事業も非常に大事なんですけれども、逆に、個々の事業が、ゾーンの統一性もなく分散してしまって、支離滅裂になってしまって、崩壊していつてしまつては、逆に、その価値さえ失つてしまう。

ブランド創造というのは、土地の魅力と、また投資意欲、さらに大きく言えば、福岡市だけじゃなくて、これからこの地域が、どういう風に日本に、アジアにまた地球に貢献していくかという意味も創造することができる。そういう点では、今、大庭委員が言われたような、ここにある種の土地由来の精神的支柱を埋め込むということは非常に大事なことで、私もいろんなまちづくりの活性化のためのイベントをやってきましたけれども、一番の理想は地域的信仰に根付いたお祭りなんですよ。

昨日は長崎のおくんちがありましたけれども、山笠など地域住民の大部分が参加するお祭りというものが、地域を支えていく、逆に言えばイベントが小規模になっていつて、対症療法的なものになってしまうと、その地域のブランド向上にはあまりつながつていかない。持続的にソフトコンテンツによるイメージの創造をどうやるかはまた難しい問題ですが、今、この提言にこめられたようなものは、ぜひやったほうがいいと思いますし、持続的なブランド創造のためにトータルにデザインしていくことが大事だと思うんですけれども、一方、市の立場からすれば、特定のアイランドシティだけに着目し、また少ない予算を傾注させるということは難しい話になってくる。

だからこそ、地域内での参加型構造を作ることは非常に重要で、出口委員長がいつも言われるような、都市の鍼灸療法という新しい街再生の視点は、そういう意味では一般行政的には成立が難しいけれども、都市の多面的発展のためには、街区ごとの再生をつなげていくという考え方は欠くべからざるものである、ということが出来ます。それをどういうふうにするかというときにこの地域住民参加型の間提言は非常に意味があります。

私も富山でもいくつか全国的に発信をしている地域モデルをやっているんですが、アイランドシティーにはこれほど意識の高い方がそろつていらつしやるから、自治会がこれまでの自治会と違つた機能を担う方向を目指したらいかかかと思うんです。先ほど委員長が言われたように、これは、ある意味で、その実行的役割と負担を負いながら、自分たちの価値創造をするという決意にも見えます。そのような新しいモデルを、連携モデルを、行政と自治会が図つていくというのも、またすばらしいことじゃないかと思つます。

【出口委員長】 ありがとうございます。

どうぞ、村田委員。

【村田委員】 お祭りといえば、うちのアイランドシティのほうでは、第2回の照葉夏まつりというのをやって、おそらく、これが一番大きなイベントだと思います。今年は2,500人ぐらいが集まる祭りを低予算の中でやろうとして、結局、どんな業者も入れず、全部手づくりでやって、ちょっと大ごとやったんですけどね。何とかこれをたたき台にして、発展させていこうかと思っています。

森会長には僕もお話を聞いているんですけど、そういう神社のほうを入れたりとかして、大きな祭りを入れていく。

そういうお祭りをしていくための自治会の活動しているところなんですけど、まだ自治協議会というのができて上がってません。新しいのでまだまとまっていない状況で、今その作業を四苦八苦しながらやっておるということを一応お伝えしておこうかなと思います。

あと、これは住宅販売のほうになると思うんですけど、自治会をつくる際に悩みが一つあります。実際、自治会に所属していないマンションとかがあって、それを取り込むのにすごく苦勞するんです。夏休みを一つやろうとして、あそこはお金を払っている、ここはお金を払っていない、じゃあ、一緒にやって費用はどうなるのみたいな、結構そういうところがあって。新しくマンションとかつくったりする事業者のほうには、自治会に入るとか、そういうのはある程度、義務というか、附帯してやってもらうような形の販売戦略をとってもらわないと、ぼんぼん入ってきて、ぼんぼん売って、そこは自治会入っていないからお金がどうのこうのなると、結局、住民がまとまれないからですね。そういう細かい話も要るのかなと。とりあえず、まとまろうと頑張っているところです。

【出口委員長】 ありがとうございます。

はい、どうぞ。

【伊東委員】 一つは、このようなメッセージの発信ということも含めて、産業的には先ほど言いました、デジタルコンテンツ系、メディア系、そして先端系という人類の将来に向けるテクノロジーというのは、環境問題と産業の調和、ブランドの創造というテーマにとっても向いているものだと思います。そのようなアジア市場にも目を向けた次世代型の産業というのは、このまちの将来と非常にフィットしているというふうに思うんです。

そういう意味では、先ほどの日中韓プロジェクトというものは、非常に魅力的なプロジェクトですけども、もっと、いわゆる環境問題という一種のバーチャルリアリティーなものも重要な思考の中でも、シミュレーション的に語られなきやいけないものを視野に入れた産業やベンチャーというものが近年大きな投資を生むということがあるので、もう

少し視野を広げていただきたいということと、ここになぜサイバー大学が入っていないのか。それは、先ほどのお言葉ですけど、私もここでサイバー大学が入っていると、地元的にも整合性があるいいんじゃないかなというふうに思ったんですけども。

【出口委員長】　そうですね、地元の事業者としてね。

平山委員、どうぞ。

【平山委員】　来月、私、どうしても出れないので、今日言わせていただきたい。

まず第1点が、センター地区の話が出ましたけれども、鶏が先か、卵が先じゃなくて、しかるべき時期にできるものであれば、できるだけ早くできたほうがいい。その中で、資金的に厳しいのであれば、PFI方式なんかで、土地を提供して、安い——安いと言っちゃいけません、コンペをやって、適正な地代で一定の期間、いろんな施設を誘導する企画力のあるところに提供すると。そういうことを、まず核になる利便施設をつくる一つの方法として積極的に進めたほうがいいんじゃないかということが1点ですね。

もう1点は、私も昨日、飛行機の上から見ましたら、今住んでいる地域は平面から見ると大変広いんですけど、上から見るとほんの一部で、まだいっぱい土地が余っているわけですね。その中で、大庭委員語るところのFICは、国際性、先端性という非常に将来に見据えたエリアとしての位置づけがあるわけです。国際交流会館というのが東区にありますけれども、施設が老朽化すれば、こういうものを積極的に引っ張ってきて立地させる。また、昔の九州芸工大——今、学部がどうなっているかわかりませんが、今、校舎が塩原にありますね。施設が老朽化して、現地建てかえが厳しいのであれば、集団移転してもらおう。

というのは、旧芸工大の跡地というのは、住宅需要のポテンシャルが非常に高い地域で、土地代は回収できて、あとは建物代だけということでしょうし、それよりも私は、国際性という中で、日中韓の関係を一步深めるために、日中韓共同でリベラルアーツ的な教養大学をつくる。その後、九大とかソウル大とか北京大などの大学院に行かせる。その学生は、必ずその3カ国から同じぐらいの人数をそろえて、必ずその国の大学に一定期間留学させて、その国民性なり文化なりをしっかりと吸収して、その上で専門知識を持って、このアジア大交流の時代に活躍してもらいたい。九大さんなんかを一生懸命口説いて、ぜひ、そういう人づくりのための機関をつくるというのも、私は、あの広いエリアをより充実させるための一つのアイデアではないかと思います。

日本はほとんど総合大学ばかりですね。教養なんというのは、ほんの1年ぽっきりぐ

らいで、まともな基礎ができない中で生半可な専門知識で、企業がその後、苦勞するというのが大概あるわけですから、しっかり教養をたたき込んだ上で、国際的に活躍できる人をつくる。それがひいては福岡市の発展につながると思います。

それともう一つ、F I Cというのは年輪で言えば幼木ですよね。これが大樹に育つためには、50年、100年かかるわけですがけれども、その場合に、先ほど自治会の森さん等がおっしゃいましたように、TMO——タウン・マネジメント・オーガニゼーション、こういう仕掛けは柏の葉といういい先進モデルがあるわけですから、それをボランティアで一定の負担をしながら回せるようにするとか。また、例えば、私は若いときには一戸建てで子供さんを育てたほうが理想だという持論を持っています。残念ながら、私は結婚してからマンションで一生を暮らしましたが、子供のときは一戸建てで、オーバーに言いますと平和台ぐらいの広さの庭で走り回ってました。(笑声)

そういうことで、一戸建てに住んで、人生の最終章に向かったときにはバリアフリーのマンションなんかに住みかえて、リサイクルすると。それを地域住民の中でうまく回していくと、中古住宅であっても、それなりの値段で売却できる。そのためには、一戸建てとか共同住宅をきれいにイノベーションするハウス会社が必要でしょう。積水さんなんかにそういうことをやってもらおう。

そういうことで、あのまちそのものの年輪を深めていく中で、地域住民の中で、ある程度、流れをつくっていったり、外部から積極的に取り入れていけるようにしたい。

また、みなとゾーンについては、前回の委員会の中で、土地代ということをしていました。土地代というのは、安くすればいいというものではないと私は基本的に思っていますけれども、客観的に適正な時価で販売すれば、市民の納得も得られるので、それを妨げるのであれば、バックアップセンターみたいなやつを設ける。これは法的整備の中で用途が規制されるかわかりませんが、大震災を受けて、公的なセクターであれ、民間であれ、福岡に大バックアップセンターを持ってくる。これから、電話・通信関係も相当変わってくるはずで、そういうものを持ってくることによって、まちを充実させて、いろんな機能面を持った、トータルで均衡のとれたまちができ上がるということですね。

それと、もう一つ、みなとゾーンと住宅ゾーン、業務ゾーンに分かれて大きい道路がありますけど、ここにはぜひ樹木等によって、セパレートという表現は適切じゃありませんけれども、高木を使うなり、また、幅があれば、先ほど提案された桜並木でもいいですけども、セコイヤとか大きい、風、海に強い大木でもって、ある程度、工業ゾーンの視覚

を、みなとゾーンのロケーションを少し緩和するような仕掛けをしたらどうだろうかという個人的な意見です。

雑駁ですけど以上でございます。

【出口委員長】 いろいろ、たくさんのご意見をいただきまして、ありがとうございます。次回ご欠席の予定ということなので、2回分お話をさせていただいたということでした。

一つは、このまちづくりのテーマにかかわる部分だと思いますが、人づくりの機能を入れるべきではないだろうか。九州大学などを例に挙げていらっしゃいましたが、たしか福岡市は、全国でも人口当たりの大学数が多いんですよ。おそらく、東京、京都に次ぐくらいだと思います。九州大学以外にも、県立の大学も含めて、おそらく二十数校の大学がありますので、是非そういう大学にも幅広く声をかけていただいて、誘致していただく必要があると思います。

そのときに、おそらく二つ課題があるのかと思います。一つは、学校法人は、直接税収増につながらないわけですね。固定資産税、あるいは事業所税の増収にはつながらないと思うので、そのあたりを政策的にどう考えるかということですね。費用便益的な従来の評価で言うと、そこは政策的に考えないといけない。

もう一つが、土地をどうやって大学に売るかということですね。土地代をただにしろぐらいのことを大学側は言いかねないので、そのときに政策的にどう考えるかということですね。

【平山委員】 九大だってただでもらっているわけではなくて、高いお金を出して買っているわけですから、それは適正な価値で購入していただかないといけません。

大学は人的非課税ですから固定資産等は入りませんが、私は全寮制みたいにすれば、そこに住む人たちが生活はするわけですから、そういう形で、間接的な税収は期待できる。また、将来的に大きな人的資産が福岡市に貢献するというぐらいの鷹揚な気持ちを持てば、パレート最適は害しないというふうに個人的には思っています。

【出口委員長】 ありがとうございます。

大学がつくり出す経済効果というのは、なかなか従来の計算手法では計れない部分がありますので、是非、そうした点も踏まえた政策を考えていただきたいということだと思います。

それから、みなとづくりの地区に関しましても、バックアップセンターといったような機能と景観の整備のことをおっしゃっていましたね。そういうことの重要性ですね。

それから、先ほど、戸建てに住んで、それからマンションにということ、言うなれば、居住者をもう少し流動化させると。

【平山委員】 将来の計画ですね。

【出口委員長】 そうすると、居住者の中身は入れかわりますが、従前の住宅をストックとして大事に扱うという。

【平山委員】 そういうことです。そういう仕掛けというのは、まちづくりの中で……。これも千葉県のあるハウスメーカーが積極的にやっていますけれども、団地が老人団地になることを阻止するために、若い世代が入ってくる仕掛けをつくるという。

【出口委員長】 美しく維持していく仕組みとか、あるいはコミュニティーでそういうことに取り組んでいくような体制をつくるということですか。

【平山委員】 住んでいる人が楽しいまちをつくらなければ意味がないわけですからね。TMOの中で、ハード面だけじゃなくて、そういうソフト面での運用によって、うまくまちづくりが進むんじゃないかと個人的に思っています。

【出口委員長】 ありがとうございます。

住宅とか居住者について、第1回目、トコ委員がご発言されていましたが、もし、女性の観点、あるいは居住者の観点からあればお願いしたいと思うんです。ちょっと考えていただいて。

先ほど、村田委員と伊東委員とのやりとりで、お祭りの話がありましたので、整理させていただくと、お祭りをもっと幅広く考えたほうがいいということで、ツール・ド・フランスのようなイベントから、あるいは地域のコミュニティーの方々がやるイベントまで、広くいろんなタイプのお祭りをどんどん活発にやったほうがいい。そのときに重要なのがデザイン、あと持続性ということで、その二つをキーワードとした戦略を立てて、ぜひやっていただきたいということで、この辺で都市のブランド化とか、居住環境の付加価値創造につながる一つの戦略のアイデアに関する頭出しをしていただきたいと思います。

トコ委員、いかがでしょう。

【トコ委員】 森委員のお話を聞いて、とっても夢があるなって思って感動いたしました。

お祭りに人が来てってということをおっしゃいましたが、多分、365日中、350日ぐらいは普通の生活だと思うんです。その以外の15日がとても夢いっぱいというふうというプロジェクトもありましたし、また一方で、大きな施設を誘致したいという

提案もありましたけれども、ご発言の中では、今のままでいいという住民の意見もたくさんあるということもおっしゃられていました。結局、その両面があるんだと。生活とお祭りと両方があるので、その辺で住民にまだ自治会に入っていらっしゃらない方がいらっしゃるということで、難しいかなというのが実感です。

それと、一つ質問です。大庭委員から言われたF I Cという言い方なんですけれども、私も媒体をたくさん持っておりまして、今後、そこでF I Cという言い方をしているのかということがちょっと気にかかります。それをお尋ねいたします。

【出口委員長】 いかがでしょう。このまちの実際の町名は照葉ですし、これもわりと評判いいのではないかと私は思いますが、いかがですか。幾つか呼び名の候補があるのですか。その中でF I Cが、今、第1候補に上がっているのでしょうか。それとも、まだ個人的なレベルのご意見ですか。どうなんでしょう。どれぐらいの熟度があるのでしょうか。

【森委員】 トコさんのお話の中にあるように、私の話は現実と夢の世界と、でも、今のままでいいというお話をしてきましたけれども、これは、まだ先が考えられないという意見を持ち合わせているところですね。夢プランが示されないと、なかなか、あれが欲しい、これが欲しいという話にはなっていないし、その辺があるので、今のままでいいというお話も多分にあると思います。でも、夢を掲げると、それがあつたらもっといいねという話になります。その辺で住民の声が二つに分かれているのが実態だと申し上げます。

それから、照葉のまちという名前ですが、民間業者がPRしていますので、照葉のまちそのものはあるんですが、私どもから見ると、照葉のまちというのは、一つの企業のイメージが強過ぎるという状態がある。それから、将来、もう一つ校区ができると思いますので、そこが果たして照葉になるのかどうなのか、その辺は一つこれからの課題になると思います。

アイランドシティ全体を考えたときに、全国発信ということでは「福岡」とつけたほうが、差別化という意味では、すごくいいのではないかとということで、FICの提案を二人でさせていただいているという状況です。

【出口委員長】 どうぞ、村田さん。

【村田委員】 住民の二面性ということなんですけれど、結局、いろんな人にそれぞれ聞いて回ると、ばんばん発展してほしいとか静かな暮らしがいいとかいろいろあって、前回のアンケート結果がそういう形になっています。

ただ、どの意見にも必ず共通したことがあって、空き地の更地じゃ嫌なわけですよ。結

局、土地的にも多分あそこの裸が無駄なんだろうから、どういう方向性にしろ、ある程度、スピード感を持ってやったほうが、最終的にお金も無駄にならないし、まちらしくなるということは、これは全員に共通する認識です。

あと、ここは森会長と僕の違うところなんですけれど、僕たちの地域では、照葉を全面的に押し出したいんですよ。企業イメージということですが、僕たちは積水がつくった照葉まちづくり協会という僕の自治会のところは、実は5分の3ぐらいを占める一番大きな自治会で、アイランドタワーさんのほうはアイランドシティのほうということでいろいろあって、そこら辺は住民の中で実は意見が分かれるところではあります。

先ほどの個人的に提案されていることですか、それとも全体的に決まったことですかという質問に関しては、おそらく、この辺でまだ個人的に思案しているところですが、全国ブランドとして考えると、F I Cであろうが、何か別の名前であろうが、素敵なネーミングを押し出してブランド化していければいいのかなと個人的には思います。そのうちの一つの個人的提案というか、そういう位置づけで思ってもらっていいと思います。

【トコ委員】 わかりました。ありがとうございます。じゃあ、決定するまでは……。

【出口委員長】 何かアドバイスありますか。

【トコ委員】 一応、媒体を持っているので、言っちゃったら「決まったんだ」みたいなことになっちゃうので、私は保留ということで、はい。だから、大庭委員がおっしゃるみたいに、違った名前で、こんな名前どうですかっていうような感じ。

【大庭委員】 これはそれぞれの考え方だと思うんですよ。だから、F I Cと言ったからといって安藤委員に捕まるわけでも何でもないし、クレームは来ないと思うんですよ。

(笑声) 村田委員のお話もよくわかるし。ただ、全体的なイメージやったら、I Cと言うよりは福岡のFつける。それは正式な名前を決めたらいいんだろうけども、僕個人は人工島という名前を払拭するためにF I Cで通そうと。だから、私は今からも公共の電波を使ってF I Cって言います。以上です。

【出口委員長】 むしろ、人工島という名前は封印していただいて、その二つがうまく競い合って、それが話題になってまた、まちの新しい魅力につなげていくという、もしかしたら、それは非常に高度な戦略かもしれませんね。

森委員と村田委員のお話を聞いて私は非常に感動したんですが、これだけ素晴らしいリーダーがいらっしゃる自治会って、ほんとうに近年珍しいと思います。

違う意見があるというのは極めて健全な社会だと思いますね。それをこういう場できち

んと言っただけというのは、ほんとうにすばらしい自治会のリーダーの方で、いいまちになる期待が私はすごく持てる気がいたしました。是非、頑張っただきたいと思っています。

では、安藤委員、その次に甲斐委員。

【安藤委員】 私も平山委員と一緒に、次回、どうしても外せない用事がありまして、欠席をさせていただきます。そこで、ぜひ言いたいことを２点だけ申し上げますけれども、いずれも福岡市にお願いをしたいことです。

１点目は、先ほど村田委員が言われました８月６日土曜日の夏祭り、私も、実は現場を見ました。その前から照葉の町は歩いてずっと見ておりますが、町の中に幾つも公園が点在していて、これは自治会で設置をされたと思うんですけども、この公園には必ず防犯カメラ——今は安全安心カメラと言いますが、これが防犯灯が一对でありました。ところが、８月６日の夏祭りには、外周緑地に２，０００人以上集まったんですかね。

【村田委員】 ２，５００人。

【安藤委員】 ２，５００人の人が集まったこの公園、実はカメラがなかったんですよ。ちょうどそこへ夕方６時過ぎに東区長さんがお見えになりまして、村田委員ともお会いしました。区長さん、ここには防犯カメラがないんですよと。実は、すぐ横のトイレでコンセントが壊されたり、あるいは紙が燃やされたという数少ない犯罪がそこであっているわけです。しかし、安全安心カメラがないんですよと。そうしたら、区長はこう言われました。「いや、ここは実は港湾局の土地なんですよ。管理者が違うものですから、そのことについては私から港湾局にお伝えします」と言われておりますので、港湾局もよくご存じだろうと思います。地域が、そういう公園に防犯カメラと防犯灯をつけておるのに、２，５００人集まる公園でついていないというのは、これはいかななものかなと思いましたので、この点、ひとつよろしく願います。

それで、もう一つが、前回も出ましたし今日も何回も出ましたけれども、交通渋滞、交通事故の関係で、最近の事故事例を少し紹介させていただきます。

７月２２日、暑いさなかでありました。朝の７時４５分です。香椎パークポートから右折中の大型車両、木炭を２４トン積んでおったコンテナ車が交差点を右折できず、電柱に衝突して横転したという事故です。警察官を２０名近く派遣しました。事故処理車両、パトカー、それから交通規制車両、あるいは消防は消防車、救急車、人員も１０名以上出してもらいました。大型なものですからクレーン車が必要だったんですが、福岡市になくて、

大野城市から20トンから30トンのクレーン車を2台派遣要請しまして、復旧したのが13時過ぎであります。ですから、5時間ちょっと片側3車線のうち2車線をふさいでおったということです。幸いにして、大きな人的被害はなかったんですけども、前回は申しましたが、こども病院ができる、あるいは青果市場ができる、そのさなかにイベントとなりますと、大型車両あるいは一般車両が混在していくわけです。そこでお願いですけども、ここあたりはきちんと交通事故がないように、あるいは交通渋滞を来さないためには、市と県警の交通規制課、東署の交通の3者でよく話し合っ、より安全な交通規制を実施してもらいたいなど。案内板あるいは表示、ここらあたりをどうするのかという一つの課題がありますので、ひとつよろしく願います。

以上です。

【出口委員長】 どうもありがとうございました。

安藤委員にはこれまでのフォーラムでもいろいろなアイデアをいただいておりますが、それに加えてさらに管理主体が異なる公共空間の管理もアイランドシティのまちづくりの一つの課題ということです。同じ福岡市でも局が違くと管理主体が違うことになるのですね。その課題をどう解決していくか。これは言うなればエリアマネジメントの話ですね。先ほど、エリアマネジメントというキーワードでくくれる話が幾つも出てきましたが、そのうちのひとつかと思います。

あとは、先ほどお祭りとかイベントを盛んにやりましょうと、精力的にやりましょうということでしたが、それに付随する交通渋滞や交通事故の問題が出てくるので、うまく官民協力して防止する必要があるというご指摘をいただきました。これも一種のマネジメントにつながってくるかと思います。

あと、甲斐委員からご発言お願いしてよろしいですか。時間も近づいてきておりますけれども、どうぞ。

【甲斐委員】 先ずは村田委員、森委員が提案されたような町がほんとうにできたいなと思います。一言で言うと並木に囲まれた、おしゃれな町を目指してほしいと思います。例えば日常生活の中で早くスーパーが入ってほしいとの要望がありますが、スーパーが入るんだったら、紀ノ国屋とか、明治屋とかいった、お洒落なきれいなスーパーに出て貰う。又はそういうイメージを持ったスーパーにしてもらおうとか、町の景観に合う、ほんとうにおしゃれというのを何か打ち出してほしいと思います。当然その前には安全・安心というのがあるべきだろうと思いますが。

それと、センター地区の話が色々出されましたが、健康と医療に特化された町と、もう一つ、今平山委員から出たように、あそこは文教に特化した町作りがいいですね。いろいろな有名校の分校とか、それとか海外からの学校を誘致するとか。先日香椎の福岡女子大の中にある幼稚園がアイランドに進出すると新聞にでていました。福岡女子大は県立、それと、須崎にある美術館も県立だと思いました。アイランドシティのまちづくりには福岡市だけではなくて、福岡県、国の支援協働が必要だと思います。市、県、国の老朽化して建てかえないといけないものを行政が先行して持っていくこともまちづくりの一つだと思います。せっかく幼稚園が行くのだったら女子大も移ってしまえばいいのではないという僕の短絡的な思いですけどね。

次にこだわっているわけではないのですが地下鉄・鉄軌道のことです。当面アイランドシティへの交通インフラはバスが一番現実的であろうとは当然思っています。ただ、文教区にして学生を非常に増やそうというとき、あそこにマンションを建てて、そこに住ませることも一つ、通学通勤させることも一つです。先程の事務局からの説明で鉄軌道導入には約2～250億円と直線化で2～250億円で4～500億円かかるとの説明がありました。いろいろな人に何で鉄軌道はできないのかと聞いたところペイしないとのことでした。今地下鉄の乗り入れはあくまでも直通というイメージで考え、コスト計算されておりますが、あそこを、西鉄の宮地岳線の車両、2両編成ですが、二日市と太宰府線みたいな形で電車をシャトルで動かせれば非常に安くできるのではないのでしょうか。先ほど聞きましたけれども、地下鉄は1キロが1万五、六千人乗らないとペイしないとしたときに、今回は2キロですよ。2キロで、今の西鉄の宮地岳線のあの2両編成車両が入ったらどうなのでしょう。又乗り継ぎですが、例えば渋谷の東横線と、地下鉄銀座線は今ビルの上に入っていますよね。あそこも乗り継ぎの為歩かないといけない。それと、東京駅の地下鉄の乗りかえは2駅分ぐらい歩きますね。そうして考えたときに、貝塚での乗り継ぎがあり、2両では一度に大量には運べないかもしれないが、定時運行ができます。将来、ほんとうにセンター地区に物や人が集まったときの込みぐあい、それと雨が降ったときの高速、一般道路の込みぐあいを考えると、ちょっと小じゃれな、定時で運行する小さな交通機関を将来的な選択肢の一つの枠として残しておいてほしいと思います。

【出口委員長】 どうもありがとうございます。

【貫委員】 用語が最初からずっと気になっていたんですけども、CO₂ゼロ街区という言葉がありますよね。現実的には、人間はCO₂を吐きますし、植物もCO₂がないと

育たないんですね。ですから、ちょっと過激かなという感じがします。

それと、もう一つは、今燃料電池をお使いになっていますが、燃料電池は、現実的にはガスを回収するときにCO₂が発生します。それで、ゼロ街区という言葉がこのままでいいのかなと思うので、ご検討ください。ちょっと引っかかっています。

【出口委員長】 事務局からコメントはございますか。

【事務局（馬場）】 CO₂ゼロ、もちろん人間が生活していますので、ほんとうにゼロになるわけではなくて、発電をするということで、発電所のエネルギーを少し抑えるという計算上の話だけですけれども、それでCO₂の発生量を抑えると。実際に、あとは省エネとか、あるいは高効率の機器を入れて家庭でのCO₂の発生量を抑えていくということで、計算上CO₂ゼロを目標としているということです。福岡市全体のCO₂の排出量自体が増えてきているものですから、そういうモデル地区をつくって、福岡市もCO₂削減に取り組んでいくということでございます。

【貫委員】 それはよくわかっています。ただ、言葉のニュアンスとしてこのままでいいのかなとちょっと思っただけで、誤解を招かないような表現にさせていただいたほうがいいかなという意見でございます。

【出口委員長】 これは、福岡市の施策の固有名詞ですか、それとも全国で一般的に使われている言葉なんですか。

【事務局（馬場）】 このプロジェクトの固有名詞でございます。

【出口委員長】 それでもう事業が進んでいるんですね。

【事務局（馬場）】 来年の秋にまち開きの予定で今進めております。

【出口委員長】 もうそういう段階まで来ているそうですね。

【貫委員】 わかりました。

【出口委員長】 どうぞ、海老井委員。先ほど県の施設ということで、県立大学や美術館といった老朽化した文教施設が話題に出ましたので、お願いします。

【海老井委員】 女子大学のお話も出ましたので、あれですから。

福岡女子大学は今年から変わりました、今、国際教養学部ができて、常時留学生が100人以上いるんですね。1年間全寮制で、留学生が一緒になって共同生活をしており、日常的に国際交流をしながら国際感覚をつけてもらう、それから語学を習得してもらうということでやっています、非常に評判がいいようです。また、大学生だけではなくて、

高校生あたりも夏休みに集中的にそこで国際交流をしようということで、何週間か寮を借りて、留学生と一緒に生活しながら、いろいろな体験をしています。これからの時代、語学が必要だと言われていています。2カ国語、3カ国語ぐらい話せる力が欲しいと。それから、中国とか韓国とかから来られる人は、みんな英語が実に堪能です。やはり、日常的に使う機会がないと語学力はなかなか伸びないんですよ。

そういう意味で、今、ベトナムとか、バンコクとか、インドとか、海外との青少年交流を図りましょうということで話が進んでいるんですけども、短期になるし、そのときだけ、1回限りになってしまうので、これから交流が進んでいくとすれば、先ほどお話がありましたけれども、大学生、高校生、あるいは中学生レベルで海外の子供たちと、ある程度長期と一緒に生活したり、交流したりできる場がないかなと実はずっと前から思っていました。

福岡市が市立高校の再編を検討されていたことがあって、その後どうなられたのかよくわからないんですけども、もし照葉の小中、あるいはその後の高校まで続けて、非常に特色ある海外に目を向けたような学科を持った高校をつくらないかなと期待しているところも実はあります。

【出口委員長】　　そうですね。では、今日はヒントをいただいたということで、ぜひ県のほうもご一緒に。先ほど県と市は一体だとおっしゃっていましたので、是非お願いします。(笑)

【海老井委員】　　それから、県立美術館は今何とも言えない状況です。いろいろとありますので。

【出口委員長】　　単に老朽化した文教施設を現場で建てかえるのではなくて、移転して新設させるというプロジェクトをこのアイランドに誘致してくる。それで、文化的な町、あるいはおしゃれな町に仕立て上げていくというアイデアをいただきました。

冒頭、説明があったパワーポイントの36ページでは、更新時期が到来している大量の公共施設があるところの説明がありましたが、このページの内容とアイランドシティのプロジェクトがどうつながってくるのかということも、事務局でもし考えられていることがあれば、またご説明いただければと思います。

時間が参りましたが、いろいろなご意見を本日さまざまいただきました。新しく、人づくりの機能でありますとか、あるいはおしゃれな町、文化的な町というキーワード、テーマをいただきました。そこで思い出したのですが、実は以前に、伊東委員や小俣委員とご

一緒にアイランドシティの将来像を考える機会がございました。そのときに、おしゃれな町と、アジアに目を向けたまちづくりとをうまく組み合わせたキーワードがないだろうということで、伊東委員のアイデアですが、「洗練されたアジア」というキーワードを打ち出されました。今日のお話を聞いていると、そのコンセプトが非常にマッチしている気がいたしましたので、是非、それもこの提言の中に組み入れられることを検討していきたいと思えます。

時間も参りました。本日、私のほうで、枠組みと論点整理の骨格を提示させていただきました。あまり役に立たなかったかもしれませんが。本日出していただきましたご意見と、1回目から3回目までに出していただきましたご意見等を含めまして、もしよろしければ、この枠組みで提言のたたき台として整理させていただき、それを次回にご提示して、その上で議論をさせていただく形で如何でしょうか。そろそろフリーのディスカッションの段階から次の段階へ移っていきたいと思っております。できる限り皆様の熱い思いを取り込んで、なおかつ簡潔に、いろいろな方に受け止めていただける提言書に仕立て上げていきたいと思っておりますので、ご協力の程よろしくお願いたしますが、よろしいでしょうか。それでは、これにてフォーラムを終了させていただきます。

では、事務局から次回に向けた連絡事項をよろしくお願いたします。

【事務局(谷口)】 次回の第5回フォーラムは、11月5日土曜日、時間は1時半から、会場は同じ会場を予定しておりますので、どうぞよろしくお願いたします。

【出口委員長】 長時間にわたりほんとうにどうもありがとうございました。

— 了 —